

325

228



始



21105



宮地猛男着

神道精義

東京 永樂堂藏版

大正
3. 9. 25
内交

序

夫れ神道は、我が國家的精神の源にして神道の盛衰は、直ちに國家の興廢に關す。故に神道の隆昌を祈るは、獨り神道家の務たるのみならず、一般國民も亦其興張を念とせざる可からず。頃日宮地君來りて、神道精義の草稿を示さる。就てみるに神代の事蹟に關する說の中には意見を異にするもの無きにあられども、神道の大體

を説明して遺漏なきに近く、殊に神道と國體との關係を論ずる處、光焰萬丈、興味の津々たるものあり、寔に好著といふ可し、冀くは、此著によりて、廣く神道の何物たるを知らしめ、神道的精神の國體の精華たる所以を明らかにし、以て皇運の隆昌と國運の發展に資せしめん事を。

大正三年九月

正五位勳四等 掌典 宮地 嚴 夫 識

自序

神國に生れて、神道を知らざるは、恰かも魚の水中にありて、水を知らざるが如し。その迂愚眞に笑ふ可きなり。近時の青年口を開けば、切りに西歐の哲學、宗教を談ずれども、未だ自國に一大哲學、一大宗教あるを知らず、彼等は異國の風習を崇ぶを知りて、未だ自國に一大國民の存するを知らず、舉世滔滔として、歐化主義に赴き、一人の立ちて、國粹の伸張を稱ふるもの無し、是れ豈帝國の危機に非ずや。帝國の危機を救ふて、頽瀾を既倒に回らさんとせば、須らく神道の大精神を、國民の間に貫徹せしめざる可

からず而かも神道たる其旨高遠を極め其辭簡古を極むるが故に古來學說區々として俗耳に入らず是れ實に神國に於て神道の知らざる主因なりとす。著者茲に見る所あり古神道を俗解して廣く知らしめんがため此冊子を編述せり之を以て神道入門書となすも可なり大日本發展史となすも可なり要は唯我國固有の大精神を童幼婦女子に周知せしめんとするのみ。

大正三年九月

著者誌

敬神
崇祖
神道精義

目次

一、神道の大精神

△帝國の大發展△神道の膨脹的精神△神代の殖民政策と帝國主義

△天照大神は大政治家

二、神道と皇室

△皇室の御敬神△崇拜の中心△明治天皇の御稜威△昭憲皇太后の御仁徳

△列聖の御功業

三、神道と國粹

△國粹の化身乃木大將△神々の實行主義△四十七士の感化△明治年間の一大奇蹟

四、神道と忠君愛國

△神道の權化補正成△至誠忠實△和氣清磨の清廉潔白△田村廣と義家

△純日本人の代表者

五、神道に顯はれたる世界統一の大理想

△社交的特色△陽氣と清白△お酒上らぬ神は無い△法華經の豫言△思想界の混亂

六、神代の太初

△宇宙の主宰神△太陽崇拜△造化の御神△天津神と國津神

七、天の浮橋

△伊邪那岐伊邪那美之命△波路を分くる天の盤舟△火の御子△根の國の暗黒界

八、日の女神と月の男神

△姉君の和魂と弟君の荒魂△朝鮮御經營△母君の御秘藏

九、杵築の宮

△八十人の御兄弟△大國主之命の御德望△出雲の大社

十、三種の神器

△神々の御集會△智惠の御神△天孫御降臨△霧島山の不思議

十一、大八洲御經營

△海神の女神△神武天皇の御偉業△初めて祭壇を築かる△太古の淳朴

十二、神道の根本

△山川草木諸神也△神性の進歩△火氣の徳△氣の流行△丹の玉垣△體と用

十三、神道の未來觀

△神道は現在教△冥府は眼前にあり△神々の神社に鎮る所以△靈魂の向上

十四、神道は實事的宗教

△活模範は活教訓△忠孝の本場に忠孝なし△我を罪するものは春秋か△乃木式實例

十五、神道の荒魂と和魂

△花を活けたり戰さしたり△大和心と陰陽の調和△光明皇后と昭憲皇太后△世界の大道

十六、神道の樂天主義

△山水明媚の地△天の岩戸△笑ひの國△滑稽趣味△涙と亡國

十七、神道の簡潔主義

△簡易生活は日本が本場△神社の簡潔△布子一點張り△もみ瓜茶漬主義
△愛情も淡泊

十八、神道の膨脹主義

△天の益人は人口増加△神々の國是△世界的膨脹と海外發展

十九、古神道と俗神道

△神佛習合の俗悪△奈良大佛は天照大神の本尊△伊勢大廟の神託△八幡大權現

二十、神道と教育勅語

△教育の根本方針△國土御經營の精神△萬國共通の大道△大人格の反映

二十一、神道の養生法

△水垢離と陽氣の吸入△神道の精神統一法△神道の心身調息術△神道の自然生活

二十二、神々の靈驗

△莊嚴の氣△神風に吹き返へされし蒙古軍△日清日露兩大役と太廟の御加護

△神爵の實例

二十三、歐米人の神道觀

△鳴る神と狼△天狗と正一位稻荷様△君臣の關係

二十四、神道に現はれたる櫻花の如き大和心

△齋戒でもなく、蓮でもない△美しく勇しい大和魂△素直なる御心榮△花蓋る戀物語

二十五、神道と佛教との關係

△儒教の忠孝説は國粹に近い△太古の祭典△佛教の弊害△土葬と火葬

二十六、現人神は神道の理想

△形式の敬神と眞の信仰△向上精進の徳△人間と主宰神との距離

二十七、神々の御性格及び御事業

△龍の神と門番の神△海外征服の御雄圖△大國主の御英資

二十八、神道と祖先崇拜

△威壓的と情誼的△萬世一系の御血統△先祖の神は家族の中心

二十九、日本國民は神道的修養をなせ

△心身の理想的鍛錬法△清潔の修養△樂天の修養△向上的修養

三十、神道は國體の精華

△花は櫻木、人は武士△花の如く美に富嶽の如く崇高なる國粹的大精神△大和魂と三種の神器△維新當時に於て興張されたる神道的精神△廣瀬中佐の示したる大和心

敬祖 神道精義目次終

敬祖 神道精義

宮地 猛 男 著

神道の大精神

熟々慮みるに我が國開闢以來、二千五百有餘年の間に萬世一系の聖君を戴き下に忠勇比ひ無き國民のあるありて、國運日に盛んに稜威年と共に加はり、國土の膨脹止る所を知らず、その昔九州の一角より起りたる大和民族は朝に一國を從へ、夕に一州を靡け、今や東洋の盟主として、日章旗の向ふ所、世界萬國その下風に立たんとするの状あるを見れば、我等日本國民たるもの等しく手を額にして、欣喜措く能はざる次第である。然るにこの萬國に比なき國運の發展は、決して偶然に出来る

ものではない之には何か深い原因が無ければならぬ即ち上下三千年の間國民の思想を統一しその元氣を鼓吹し絶えず大和魂の涵養と發揮に努力せしめた所の根本動力があつたに相違ないこの大動力こそ即ち神道である。

日東帝國が今日の如く膨脹に次ぐに膨脹を以てし駁々乎として巨人の如き進歩を止めないのは畢竟其根柢に於て神道といふ一大動力があればこそである換言すれば今日の日本を産みたるは我が國固有の國民性の致す所で我が國民性は神道の大精神より産れ出たる事を知らなければならぬ。

さらば神道の大精神とは何であるか日本歴史の上に炳として照り燦として輝ける神道の大精神なるものは果して何であるか一言以て之に答ふれば神道の大精神とは即ち神道の膨脹的精神である生めよ

殖えよの精神である天の益人的の精神である我が國神代の歴史を調べてみると神々の間に屢々天の益人なる言葉が繰り返されて居る天の益人とは一體何を意味して居るか近代語を以てすれば天の益人は天上に於ける人口の増加である神々は日本の上代に於て天の益人を祝された即ち天孫人種の増加を以て非常なる祝事とし之を以て國是とせられたこの一事は日本の古代史を讀む者の等しく首肯する所である建國の當時大八洲の草萊を拓くには是非共益人を必要としたであろうが然し益人を以て唯にそれだけの意味に止らしめば日本建國の精神は案外貧弱なものである神々の深き御思慮より推想するも之には何か重大な意味のある事を思はなければならぬ。

上古史の記録を以て眞實なりとせば益人なる一語の中には海外發展なる新意義が含まれて居る伊邪那岐命は外國の地理に精はしき神

々をして、水泡煙れる八重の潮路をわけ行きて天の壁立つ極み天涯萬里の異境に、新殖民地を求められた。又別に陰神伊邪那美命に命じて黄泉國即ち朝鮮を治めさせられ御子須佐之男命にも朝鮮の御經營を命ぜられた。之は單に吾人の憶測許りでない。太古史に一隻眼を有する者は、何れも其所見を一にする所である。

天の益人を以て理想とせられた天上の神々は、その自然の結論として海外發展を以て皇國の國是とせられた。今日の政治家がバタ臭い口を開いて殖民政策とか、帝國主義とか唱へるけれど、之は實は神代のお古であつて、今を去る三四千年の昔已に神々の抱懷されたる大精神であり、大理想である。神代の昔より大正の今日に至る迄數千載を一貫し來れる國是である。

元來我國の神々は、一面偉大なる政治家であらせられた何れも政治

的御手腕が、殊の外秀いで、居られる。その我國神代史は國土の經營を以て始終して居る。伊邪那岐伊邪那美兩神が天の浮橋即ち天の磐舟に乘られて、簇々雲の如く湧き立ちかへる萬里の波濤を凌いで來られた時、第一にお造りになつたのが、この島、之を御手初めとして、次ぎに大八洲を造られた。そして之が御經營には、慘憺たる御苦心を積まれた。即ち斯の如く開國の第一歩よりして、殖民的の傾向が現はれ、大發展の精神が見える。神代の神々は、何故に極力大發展を企圖されたか、之は必要に迫られたからと云ふではなく、寧ろその衷心に於て、一大膨脹的精神を有せられたからである。

この大精神に依つて、日本國は建てられ、此大精神に依つて日本國は發展に次ぐに大發展を以てし、遂に今日の如く、東洋の盟主として、世界に雄飛するに至つたのである。苟も日本國の存する限り、此大精神は決

して廢る事は無い。そして此大精神は日本を誘ひて遂に世界統一の大理想を實現せしむるに至る事は吾人の信じて疑はない所である。

最初伊邪那岐命の後を承けて、大國主命が、大八洲御經營になつた時には、命の命令の達するは、僅かに出雲附近に過ぎなかつた。然るに命の御武勇と御仁徳を以て、順次中國を御征服になつたが、然しそれでも統治區域は出雲附近の二三ヶ國を出でなかつた。次いで遷々藝之命より三四代の間は、高千穂を中心として、漸次領土の擴張を御計りになり、神武の御東征に依つて九州は素より、中國近畿一帯の地を御征服遊ばされた。建國當時、伊邪那岐神御經營の時代より見れば、實に隔世の感がある位、大膨脹大發展を遂げられた。それより歴代の聖上は、國土の膨脹を以て念とし、給ひ専ら東夷の御親征に主力を注がれた。かくして北海道を除くの外、大八洲は、周ねく皇化に潤ふに至り、最早力を國內に伸ばす

の餘裕なきに至りたるを以て、茲に漸く國外に向つて驥足を伸ぶるに至り、神功皇后の三韓征伐に次いで、秀吉の朝鮮征伐あり、以て國威を海外に輝かし、明治年間に入りて、日清日露の二大役に依つて、愈々國土膨脹の大理想を完成する事を得たのである。

げにや日本の建國は、初めて地に落ちたる樞實であつた。この樞實は神々に依つて培はれたる國粹的大精神に依つて、漸次生長し、枝を擴げ、葉を繁らし、今や三千有餘載の年月を経て、轟々天を衝くの大樹となつた。此樞は、今や非常な巨木ではあるが、決して老樹と云ふ可きでない。今も尙新勢力を以て、日と共にいよ／＼繁茂し、遂に天空を蔽はずんば止まざるの概がある。

繰り返して云ふ、日東帝國の膨脹は、大和魂と平行して進むのである。大和魂の智仁勇は、膨脹の根本的動力である。智を以て計り、勇を以て取

り、仁を以てなづるかくして日本は發展の歩を進むるのである。發展せよ、膨脹せよ、進歩せよ。是れ實に日本の使命である。神道の大精神は之を外にしては、また求むる事が出来ないものである。

二、神道と皇室

申すも畏き事なれど、神道と皇室との御關係の親しさは、吾人がその祖先に對するが如く、皇室の御先祖は、正しく天照大神にましく、我等には、唯神として崇拜する天照大神も、皇室にありては、正しく御血統を引かれたる御遠祖なれば、唯に御尊崇遊ばすのみならず、血族上の御親しさも、自づから其中に含まれて居らるゝ筈である。神と國民との間は、天地の如く隔絶するが、神と皇室の間は、同じく天上に在りての上下を分たるゝに過ぎない。神道と皇室とは、かくも親し

き御關係にあらせらるゝが故に、皇室の御敬神はまた一層で、之は單に形式上の御敬神許りでなく、列聖一人として、神道的精神を御體得遊ばせられぬはなく、何れも神々の御行跡を御模範とせられて萬事とり行ふて在らせられるのである。

上代祭政一致の時代にあつて、祭事を以て政とせられたのを見るも、如何に御敬神の念厚く従つて祭を重視されたかが分る。御敬神の結果は、神格の御模倣となりて現はれ、歴聖中特に神道的精神に富ませられたる御英明の御方は、何れも就中御敬神の念厚き御方々である。かくして神道と皇室とは、水魚の如き不離の關係を保たれて來た。

今茫々三千載を重ねる我が大日本帝國の歴史、少くともその内部を貫流せる事實をみるに、神と皇室と人民と、以上三者の關係に外ならない。歴代の皇室は神代の神々を模範として政にいそしみ給ひ、國民

は皇室を典型としてその行を謹むといふ風に神と國民との間には終始皇室が立たれて居た。それで何時の時代でも國民が崇拜愛慕の中心は常に皇室に向ひ皇室を中軸として發達し來つたのである。事情かくの如くなるが故に何時の時代に於ても國家的英雄として吾人の崇め奉るは九重の人々であつた。然らざるも皇室の御信託を忝うせる臣達である。

筆に上すも畏き事の極みなれど、我國歴代の天皇は人種ならぬ御血統の致す所か、又御敬神の然らしむる所か、何れも御仁徳御利濟に渡らせられ、雄々しくも又優さしき大和心を遺憾なく具へて居られた。中には雄略武烈兩帝の如く、雄々しさの餘り、萬づ荒々しき帝もまし／＼たが、それとて外つ國に見る如き、殘虐の御振舞は毫もおはさず、列聖一として秀でさせ給はぬは無けれど、中にも際立ちて仰がるは上つ代に

ては神武の帝下りては、明治天皇、このお二方こそ、日の本の天皇として、あらゆる美點を集め給ふた現人神にまし／＼た。

明治天皇の御仁徳御稜威は、今更の事にあらねど、吾人の特に感佩して忘るゝ能はざるは、その御勇武御賢明に渡らせられたる外に、日夜御儉徳を守らせられ、文雅の御心榮勝れさせ給ふた所である。數多き御製を拜誦するも、又時々新聞雜誌に散見する平生の御有様などに察するも、一天萬乗の君たる陛下が如何に質素簡易なる御調度御生活に甘んせられたかが分る。漏れ承る所に依れば衣食住も日本流の淡泊なるを愛で給ひ、御座所にも行燈を用ひ給ふたといふ如何に奥床しき御心掛ぞや、是れ一は御天性に依るならんも、又一には並々ならぬ御敬神の功である。

天皇が萬づ御文雅にまし／＼、御風流の豊かなりしは御製にも現は

れて居るが、天皇には又頗る御飄逸な性格がおはしました。衣冠を解かれて常の御座所に入られて後は、女官近侍の人達にも打ち解け給ひ時には御戯談も仰せられて興せられたさうなある五月雨の日、軒端に釣せる大瓢の落ちたるを御覽じてカラ／＼と聲高く笑はせられた事や、土方宮相の座睡を御覽じて、居眠りの大臣と呼ばれた事や、其他維新當時、西郷、木戸等の諸豪を召されて共に大盃を傾けて、時事を談せられた事など思ひ合すに、明治の帝の如何許り御資性の活達に渡らせられた事、大らかに胸中常に閑日月を有せられたかが分る。この御心こそ、日本固有の大和心であつて、神道と云ひ、國粹と云ふのは之を措いて、他に見られないのである。

先づ日萬民哀悼のうちに神去りまし、昭憲皇太后は、御容姿は玉の如清らに、御心榮は花の如麗しく、御仁徳は申すも更なり、その御見識と

御婦徳とは、日本婦人の理想として仰ぐ可く、その御人格は歴代の皇后中にありても、一際勝れさせ給ひたるは世人の等しく認むる所である。皇太后は非常に趣味性に豊かであられたが、その御趣味は明治天皇と同じく純日本の御趣味であらせられた。その御好物は、興津鯛や白魚の様、な至極淡泊なもので、四季折り／＼の御遊興も、若菜摘みとか、茸狩りとか、昔の物語本にでもありさうなみ國ぶりの御催しであつた。伊藤公は皇太后を評し奉つて、古來京都の産したる第一の御人物と云はれたさうだが、唯獨り京都許りでなく、日本女性中第一の御方で、天照大神の御徳を具へ給ふた御方である。

その他列聖の中にて、神武天皇の御雄圖は申す迄もなく、崇神、垂仁の切りに敬神の念を示されたる、日本武尊の御壯烈、神功皇后の御遠征など、夫れ／＼に吾人國民の欽仰に値ひするものがある。就中、厩戸皇子と

藤原鎌足公との御仲らひに於て上古簡朴の有様の徳ばれて頗る床しい心地がする。歴史で見ると皇子の蹴られた鞠を鎌足が拾ふて奉ると、皇子は跪き會釋して受けられたとある。日本の君臣の間には、こふした親しい温い打ち解けた關係があればこそ、今日の如く皇運の隆昌と國運の發展が出来たのである。

三、神道と國粹

更に下つて國體の精華を國民の間に求むれば、最近に於て乃木大將の如きは確かに明治年間唯一の國粹的英雄で、最も能く我が國粹を代表して居る。世の史家評家は、萬口一齊に將軍を以て、武士道の權化なりと云つて居るが、之はまた、到らぬ詮議で、吾人は百尺竿頭一步を進めて、彼を以て、寧ろ我が神道の化身なりと申したい。

なる程將軍が、武士道の經典と云はる、中朝事實を居常愛讀して措かなかつた所玉とも愛づるいと、子の二人迄旅順城頭の露と消えしも、尙且毅然として、聲色共に毫も變せなかつた所、その他日常生活に於て、規律秩序を重んじ、忠實剛健時に鬼神の勇を示したるは、是れ確かに武士道の精華で、古武士の面影を存するものと云ふも、負言では無い。唯夫れ大將の人格言行が之に盡くるとすれば、乃木大將は要するに一介の武辯のみだ。彼を以て神とし、國粹の權化なりとする事は出来ぬ。

大將の全人格中には、武士道と云ふ様な左様な窮屈なものではなく、一層大きな遙かに自然的な一大精神、一大氣魄があつた。この大精神、大氣魄こそ、朝日に匂ふ山櫻の如き、優美高尚雅圓満なる國粹即ち大和魂である。

乃木大將は、一面非常に優美な所があつた。之は決して修養の結果で

はない。將軍の性格には、自然にそう云ふ和みがあつた。將軍は部下を我が子の様に愛した。素より馬丁でも女中でも賤しい召使の者迄、したたる如き慈愛を注いだ。殊に馬を愛する事は非常なもので、愛馬の爲に堂々たる練瓦の厩を造り、飼料なども最上等のものを用ゐて居られたさうである。自及當日の如きは、涙乍らに愛馬の鼻面を撫でられ、手づからパンを割いて與へられたと云ふ。何と優らしい風懷ではないか。

將軍の風采は決して武骨ではなかつた。軍人としては寧ろ小作りな體格で、如何にも清々しい華奢な姿勢、顔付は上品で、目口に云はれぬ愛嬌があつた。元來軍人を以て、一方に不粹な頑陋けなものとしたのは、鎌倉時代以降の事で、その昔、奈良、平安の頃は、軍人でも無趣味の人間より、端麗閑雅な人物が尊重されたのである。元來武士道のやうに、人間を極端に實用視し、社會を没趣味にしたのは、儒教の影響である。儒教の様な

小賢しい、生猪口才な學問の傳來せぬ前は、人の心も萬づ鷹揚で、赤裸々、天真爛漫、自然のまゝに美を愛し、美を味ひ、感情の拘束といふ事は少しも無かつた。源氏物語などには、この趣が仔細に寫されてある。斯の如く日本固有の思想より云はば、軍人でも乃木大將の如く、端正閑雅なる人物が吾々大和民族の理想である。大將が一代の渴仰を集めて、國民性の精華と迄持て囃さるゝに至つたのは、こんな所にもその原因が潜んで居る。

大將の優び心はその詩歌を通じて最も能く現はれて居る。戰場にあつても、詩を作る。演習に出ても歌を詠する。その歌には、また櫻に關するものが頗る多い。これ等も餘程國粹と關係して居る。大將は又ナカノの能書であつた。字は雄健であつたが、伊東元帥の様な武骨一點張りのものではない。勁い線の半面に、何所かふつくらとして、濫情の見はれた

所があつた。

將軍の忠君愛國は云ふ迄も無いが、申すも畏けれど、將軍の明治天皇に仕へ奉つた言動には、如何にも親しげな打ち解けた所が見えた。水魚の仲とは之れであらう。之は要するに、形式一遍の儒教的倫理では無い。將軍の衷心より湧き出づる尊敬愛の至情が現はれたものである。將軍にして萬一この至情が無かつたならば、何故に御跡したひて悲壯なる最後を遂げたか。將軍は何事に依らず至情を以て實行した人で、付けたり議論は、虫唾の走る程忌み嫌はれた元來我國に理窟の這入たのは佛儒兩教の傳來後である。それ迄は理窟も哲學も道徳も無かつた。唯あるものは、神隨の道で、思想は能ふだけ簡單に、實行には能ふだけ敏活ならん事を期した。畢竟乃木大將の一言一行が、吾人の胸に深刻なる印象を興へたのは、こふした點に於て、兩者の間に共鳴する所があつたか。

らだと思ふ。

將軍は又非常に淡泊な人であつた。將軍の言行には、揉み瓜で、お茶漬サラ／＼といふ所があつた。金錢名譽に淡泊な許りでなく、道樂にも趣味にも一切に淡泊であつた。この淡泊から一轉して時に飄逸な言動となつて現はれた。そして其生活は頗る簡單で、清潔を貴ぶの風があつた。將軍は頗る謹嚴な人であつたが、然し決して陰氣な人物ではない。始終戲談を云つて笑つて居られた。將軍の性格は外國人では、米國のリンコンに酷似して居るが、唯一つリンコンは、何時も悲しげな顔をしてるので有名だつたが、將軍は何時も陽氣に快活であつた。この淡泊とか、簡易とか、清潔とか、快活とか云ふ特性は何れも大和民族固有のもので、即ち産靈神を初め、神代の神々に依つて示されたる神道的大精神である。

平田翁も云はれた様に、神道なるものは、儒教の様な教訓でもなく、又佛教の様な理窟でもない。桃李物言はねど、自ら人を薫化する様に、八百萬の神々達の雄々しくも、實やかなる實例に依つて、吾人は自省し、自證し、遂に神の如き人格に達せんとするものである。例へば同じく忠義の話でも、孔孟の説法は小うるさく感ずるが、四十七士の討ち入りを聞くといへば、大に感奮して自らもその範にならば、んとするが如き、これ實に先人の模範に刺撃せられて、胸底深く藏する忠義心が喚び起されたものである。老子も云つた様に、大道廢れて仁義ありて、人心の素直な時には、四角張つて、何も仁義や忠孝のお説法しなくとも、人心の自然に任しておけば、自然に世の中は圓く治まるものである。その昔我國がまだ儒佛の影響を受けない時には、三常五倫など、云ふ屁古六ヶ敷ものは、更に無く、素より仁義禮智信など、いふ名も知らなかつたけれど、その

事實は立派に存して、何れも是等を實行して居た。彼等は祖先の言動を言ひ傳へ、語り傳へて、その嘉言善行に見習はうと努力する。外更に他念は無かつたのである。身親ら嘉言善行をなすのみで、何の理窟も付けなると云ふのは、如何にも奥床しい心根ではないか。漢學者や洋學者は、之を以て野蠻とか蒙昧とか云つて居るが、吾人は寧ろこの不言實行の奥床しい態度に向つて、極力讚美の辭を捧げたいと思ふ。

この頃は又漢學佛教の上に、更に基督教や歐米の小六ヶ敷哲學や文學が輸入されて、複雑な七面倒な物騒千萬な世の中となつた。こんな世の中、乃木大將の如き和魂の結晶が現はれたのは、誠に不思議な現象で、誰れかも云つたやうに、確かに明治年間の一、大奇蹟である。

四、神道と忠君愛國

中世に於ては、神道の化身として、楠正成がある。彼はその人格性行に於て、乃木大將に酷似して居る。大將をして若し當年にあらしめたるらば、正成と略ぼ同様の事をやつたろうと思はれる。吾人の正成に傾倒するのは、決してその識見や才幹の爲ではない。又必ずしも彼が當時にあつて、有名な軍略家であり、又武勇絶倫の大將たりしが故でもない。吾人が彼に傾倒し、正成を以て、我が國體の精華とする所以のものは、彼が徹頭徹尾至誠の人で、終生報國盡忠の爲に粉骨碎身したるその健氣なる心意氣であつた。

後醍醐帝の初めて彼を召すや、彼は直ちに走せて宮闕に至り、天皇に拜謁して、さて云つた。陛下願はくは意を安せられよ、正成かく参りたる

上は賊軍如何に衆くとも、某し計を以て必ず打ち靡け申す可しと。當時北條勢は雲霞の如く押し寄せて、十日の見る所、官軍に勝目ありとも見えざりし際、渺たる一楠廷尉は、宮闕の前に大言壯語して、誓つて賊軍を撃退し申さんと、言葉清しく言ひ放ちたる所より見るも、この際彼の胸中には、餘程の大決心のあつた事が分る。即ち其一身を以て、我が君の楯ともなり、矛ともなり、一族徒黨を犠牲にしても必ずや時難を拯はんとしたのである。至誠の人に非ざれば、到底この決心は出來ないのである。闕下を退くや、彼は直ちに赤城に城き、賊の大軍を一手に引き受けて、毫も屈する事なく、あらゆる智術を盡して、孤軍奮闘を續けたる如き、又湊川に敗戦して、自ら及するに當り、弟正季に語りて曰はく、所感如何と、正季曰く、願ふらくは再生してこの怨を報せんと、正成莞爾として曰はく、然り予等七たび生を人間に享けて、醜賊を屠らんと何と云ふ雄々し

い意氣であろう。何と云ふ健氣な覺悟であろう。純忠無二なる正成の全人格は、この一言の中に躍如として居る。

正成は皇室に對して、無二の精忠を盡したの素より、何事に向つても、至誠を以て、之に當り最も忠實なる心榮えを見せたのである。この忠實なる心こそ、神道の根本精神で、大和魂は之を除いて、他に求む可からざるものだ。

乃木大將、楠正成と共に、我が國粹を代表するに足るべき人物は、實に和氣清麻呂である。歴史の傳ふる所に依れば、彼の家は代々神官の職を奉じ、昔より非常に清廉潔白の士を出すを以て有名であつた彼の姉は、孝謙女帝お氣に入りの女官で、その性格も濃厚老實、女官達の模範として頗る重く用ゐられたさうである。孝謙天皇重祚せらるゝや、道鏡を太政大臣禰師に任せられ、諸政百端悉く彼の方寸より出で、其權威内外

を傾け、頻りに土木造營を起し、國力日に乏しく、收斂日に重く、怨聲天下に滿つるの時、太宰府の神官道鏡に媚びて、宇佐八幡の神人に憑りて、天位を道鏡に譲り給は、天下太平ならんとの託宣ありと奏上した天皇も、流石に疑はしく思されたものとみえ、姉の縁故により、清麻呂を召されて、八幡の神託を受ける事を命せられた發するに先だち、道鏡は清塵を呼び寄せて目を怒らして曰く、汝一身の禍福は復命の辭一つにありと。清麻呂は即日出發して太宰府に到り、齋戒沐浴して、神前に額づき一念を凝らして、神託に預らん事を祈念したるに、某夜忽然として、眼前雲煙の棚引くと思ふ間もなく、身の丈一丈もあらんと思ほしき衣冠束帯の巨人現はれ、聲朝らかに宣らして曰はく、吾こそは、八幡の神體なり。頃日道鏡不臣にして、天位を窺窺すと聞く。我國昔より皇統一系、君臣の分定れり。道鏡何者なれば、この非望を抱くや、大逆無道なり。速に誅し給ふ

可しと。その聲百雷の一時に落ち來るが如く、流石の清麻呂も面を上ぐるを得ず、恐れ慚しみ、神託を奉じて直ちに返り、この由を一言一句も改むる所なく、天皇の前に復命した。之を聞くうち道鏡の面色は見る／＼變り、足をあげて怒つたが、清麻呂を穢麻呂と改名し、大隅の國へ流した。この後、天皇崩御ありて、光仁天皇立ち給ひ、道鏡は遠國に徙され、清麻呂は直ちに召し返され、高位高官を授けられ、大にその忠節を嘉し給ふた。後世護王明神と云ふは、清麻呂の事である。

清麻呂の事蹟は、我が國史に於て、頗る有名な話で、三尺の童子も熟知する所であるが、吾人は此話を聞く毎に、實に云ふ可からざる感慨に打たれざるを得ない。事の順逆は誰しも知つて居る。然し一朝危機に際したる時、一命を賭して迄も、正論正義を主張するに至つては、古今多く其人を見ないのである。清麻呂の如き、硬直至誠の人でなければ、到底この任

務は果たせないのだ。清麻呂の功績は、咄嗟の間に成就された様であるが、然し天皇がかゝる大事を御信託になつたのを見るも、彼の品性が遠く當代にぬきんでゐるに相違ない。吾人は彼と乃木、楠、兩將軍を合せて日本の三寶と云ひたい。國粹の權化純日本人の代表者は、是等三人物を除いて、他に求め得ないからである。

上代の武人では、坂上田村麻呂、八幡太郎義家の二人を以て、最も勝れたる民族性の代表者とする。坂上田村麻呂は、人も知る如く、桓武天皇の時、蝦夷を征して大功を樹てたる人。國史は彼を誌して曰く、蝦夷の事件は、歴代に絶えず、時としては、王師利を失ふ事も多かりき。桓武の朝に至り、征夷大將軍坂上田村麻呂に詔して、之を討たしむ。田村麻呂身の丈六尺、面は熟せる棗の如く、鬚は黄金の針の如く、武藝勇力、萬夫も當り難く、怒る時は、猛獸も恐れ笑ふ時は、小兒も懐く、その人を御すること、寛大に

して、兵士皆之が爲に死力を盡しければ、向ふ所風前の草の如し、恩威兩つながら蝦夷に振へり」と。この記事に依つてみるも、田村麻呂が日本武人として、理想的絶好の資質を有して居たのが分る。義家は御冷泉天皇の時父頼義と共に、陸奥の豪族安倍父子を征して之を討滅したる勇將である。史家彼を評して曰ふ、驍勇絶倫、騎射神の如しと、衣川の破れし時、貞任城を出で、落ち行くを義家追ひ付き、弓に矢を注し、衣のたては、縦びにけり」と下の句を云ふや、貞任取り敢えず、年を経し糸の亂れの苦しさにと付けた。何といふ情趣、何といふ風懷、今日の戰術より云は、素より愚の極、優長の至りである。うが、兵馬の間にありて、猶且、悠々たる雅懷を述べ得るといふは、胸中多大の餘裕あるものに非るよりは、出來ないことである。花を活けたり、戦争したり、これぞ眞の大和武士といふ彼の如きは、實に大和武士の典型と云ふても可いのである。鎌倉時代には、義

經といふ大立物がある。執拗蛇の如き阿兄頼朝に苦められて六十餘州身を置くに所の無い様な可愛相な目に會ふたが、その人物力量の點に於ては遙かに頼朝を凌いで居た、勇武にして敏捷、淡泊にして典雅、これ實に義經が日本武將の代表者として、今日迄その盛名を謳はれて居る所以である。

藤原鎌足菅原道真も亦好個國粹の代表者であるが、唯鎌足は佛法を信じたる所に何となく純日本趣味ならぬ性格が見えるし、道真は學問識見群を抜きたる温厚の長者であるが、時に文弱に流れて、勇斷を缺ぐ所は大和男の子として、多少の缺點と云ふべきである。その他元の大軍を一舉に亡したる北條時宗や、時に勾踐なきにしもあらずと、風駕を船上山に迎へて無限の感慨を漏したる兒島高德や、是等國粹の代表者は頗る多いが、紙數に限りあれば右に止めてをく。

五、神道に現はれたる世界統一の大理想

そもく、我が國は建國の昔より確かに完全なる國民性が定まつて居た之は神代の昔神々の御行跡を見てもよく分る事であるが大和民族の特性は第一政治的なる事天照大神が上津國を統治されたり伊邪耶美命が根の國を治められたり素盞雄命が朝鮮へ遠征されたり神々の御行動は總て政治に始終して居る第二に社交的なる事政治的なるが故に従つて社交的である八百萬の神々の中でも笑ふ神が多かつたのを見ても日本は神代の昔から和氣を重んじて社交といふことに特別注意したのが分る第三は實行的なる事日本人は古來餘り理窟を云はない理窟を捏ねる閑があるならその間にドシ／＼實行する神々のうちに理窟を云はれる神は一方もない何れも鐵腕を揮ふて雄々しく

斷行されて居るのだ或學者に云はずと古來日本人に思想界の天才の生れなかつたのは元來日本人の頭腦が單純で性格も卒直だから到底大思想家の生れるやうな素地がないのだといふ之は一應尤な説であるが吾人の見る所に依れば日本人に大思想家の出ないのは必ずしも日本人の凡庸な爲では無い腦髓の素質は非常に秀拔であつて思想界の事にも充分成功し得る丈の天賦はあるがその天性の傾向が寧ろ實行の方面にあるから全身の精力を實行に傾倒し従つて思想界の事に手を延ばす餘裕が無いのである第四は淡泊簡單といふ事之は神々の御性質にもよく現はれて居るが今日の神社や神祭の儀式などに一層よく現はれて居る第五は廉潔正直といふ事このうちには清潔といふ意味も籠つて居る我が國の代表的人物には何れもこの性質が見られるのである第六は陽氣潤達といふ事元來日本はいはゆる日の本で地

理の上から云つても、陽氣の本来本元であるし、諸神の中で特別の地位に立たれ、今日國民崇拜の中心になられたる天照大神の御本體は、則ち日輪である。今日神式に於ける祭事の頗る陽氣なるは、素より古事記でも、かの石戸開きの條を讀むと、歌ふ神、踏る神、太鼓打つ神、笛吹く神、喧嘩雜沓、今日の所謂ドンチャン騒ぎの中に、幕ならで天の岩戸が開かれたのである。そして天照大神は非常にこの陽氣を好まれたさうである。又今日吾人の見る如く、神前に供ふるものは、酒と肴である。お酒香らぬ神はないで、神様は何の神様でも、酒のやうな陽氣なものが好きである。日本の音楽なり、詩歌なり、俗謡なり、何れを見ても、何れも快活で輕妙で、陽氣である。支那の詩のやうに、ブン／＼怒るものなければ、西洋の詩のやうに、メン／＼泣くものない。何れも樂天的で、讀んで居つても、氣が暢び／＼する。

此等の諸性質を綜合して考へてみるに、日本は建國の太初より、世界的に大發展をなす可き運命を荷つて居る。積極政策を以て、大に海外に雄飛す可き前途を有して居る。今から三千年も前、釋迦はその法華經中に、日本の他日世界統一の大事業を完成す可き事を豫言して居る。日蓮は之を根據として、到る所に日本の世界統一を宣言して居る。神道家では平田翁なども、極力之を豫言して居る。之は單に宗教家の豫言に待つ迄もなく、少しく古史に眼を通したものは、何れも日本の世界的發展を疑はない。日本の使命は斯の如く重く、日本の前途は斯の如く多望であるが、唯この使命を全うし、多幸なる前途を招徠せんがためには、是非共に日本の國粹を何處迄も維持し、この國粹を基礎として、その上に世界的大帝國を築かなければならぬ。然るに建國以來の歴史を見るに、世を経るに従ひ、漸次國粹は退歩し、種々の不粹分子の侵入に依つて、國力は次

第に弱められて居る。この傾向にして止る所を知らずんば遂には日東の大帝國も滅亡に至るやも計られない思ふて茲に至れば實に肌粟せざるを得ない。

佛法の慈悲忍辱は宗教としては結構であるが、一たび之が政治に混入さるゝに至れば、内治は文弱に流れ、外交は宋讓の仁に陥り、國力は次第に弱められる。又儒教に心酔するの結果は漢土あるを知りて、皇國を忘るゝ大馬鹿者を生ずるに至り、遂には賣國不臣の徒も出た最近の基督教は世界同胞主義で、この主義を極度迄押し擴むれば必ずや非戰論となり、又階級を無視して、遂には國家の秩序を紊亂し、國辱を醸す事となる。現に斯ふ云ふ實例は屢ばあつた今日、社會主義無政府主義の現はれ、忌はしい危険思想などの生ずるは、畢竟その淵源は基督教の中毒である。

殊に得體も分らぬ哲學文學が盛んに輸入せられ、一知半解の青少年を蠱毒する事甚しい。哲學文學の研究も可いが、確乎とした自分の立場を定めず、置いて、手當り次第亂讀するから、甲に行き、乙に走り、丙に迷ひ、丁にたぶらかされると云ふ、工合に、浮草の所を定めず、漂々泛々として思想の歸する所を知らざる有様である。幸にも此神國に生れ乍ら、神道の片端だに知らず、萬國に比類なき偉大なる國民性を持ち乍ら之を護持し、發展せしめ、様とも思はず、國粹を捨て、國民性を忘れ、全然内を空にして、外來の思潮を歡迎ふるに日も惟れ足らざるの状である。何といふ情けない賣國奴共であろう。こふ云ふ厄介者が増せば、増すほど國は弱くなり、國運の發展は防げられ、その極、遂に亡國の懼れなしとも云ふ事は出來ない。此等のパチルス共を一掃して、國粹の新元氣を鼓吹するが爲には、必ずや神道といふ殺菌劑が要る。神道は日輪である。神道は古

くして新らしき宗教である。若し夫れ神道界に大天才現はれて、この偉大なる力を真向にふり翳して國民教育の事に従は、大風の野を渡るが如く忽ちにして一大反響を起し遂によく我が思想界を神道の旗下に統一し、神道の導くまゝに、大日本國民は帝國主義をふりかざして世界統一の大事業を完成するも、敢て至難の事ではあるまいと思ふ。

六、神代の太初

天地開闢の太初、天之御中主神といふ天地の中軸に立たせられる大神がおはした。この大神こそは、宇宙の根元であつて、天地間にありとあらゆる事も物も、この大神の思召に依つて造られたものである。この大神の御事を基督教では、上帝と稱し、佛教では真如と云ひ、易の方では太極と云ひ、儒教の方では、天と云ひ、道教や陽明學の方では無と云ひ、自然

と云ひ、太虚と云ひ、研究の方面の異なるに従ひ、その名稱は違つて居るが、矢張り之は天御中主之神を指したものに相違はない。主宰神造物主たる天御中主神は、天地開闢の以前より天地の破壊して後迄も、永劫に亘つて實在せられ、生と進化の理に依つて、この宇宙の開発をお計りになつて居る。

今日見る様な天地の出来ない前には、宇宙は混沌として、全然鶏卵の黄味を打ち碎いた様に、モヤ／＼したもので、何が何やら薩張り分らなかつた所が年月の経つに連れて、葦の芽の様なものが、ピラ／＼と上つた。それからして段々天地の區別が出来るやうになつた。即ち軽くして清めるものは上つて天となり、重くして濁れるものは沈んで地となつた。茲に於て初めて今日見る様な天地が出来たのである。そして最初ピラ／＼上つた葦の芽の様なものは集積して天の中央に懸つた。之が即

ち日輪であるこの日輪こそは、火の精陽氣の結晶で、我が神道では之を以て一番大切な本尊として居る。この故にこの日輪を統治す天照大神は神々の中でも特に重要な地位に立たれて居るのである。天地の出来て間も無く、高皇産靈神皇産靈の兩神が出現まし／＼た。この兩神は素より天御中主之神の御稜威に依つて出現されたには、相違ないが、直ちに大神の御子と解する譯にはゆかぬ。古史を見ても、單に神成りますとあつて、誰の御子ともない。その御稜威は大神にこそ及ばないが、他の諸神の最上位にあつて、最も靈妙なるお方であつた。この兩神はその字義から云つても、高大無邊の奇靈を有つて居られる事が分る。神と云ひ高と云ふは何れも尊稱で、その神變不可思議の靈力を稱へたもの、皇といふは、之も神のみに當り、矢張り兩神を尊めた言葉である。ムスと云ふは産むとか出来るとかいふ意味だ。古歌にも「我が君は千代に八千代にさ

いれ石の巖となりて、苔のむす造」とある。之は昔の生えるまでといふ事である。又ムスコ、ムスメなどいふも、我が産んだ女の子の子男の子といふ意味である。それからムスビのビは日の事で、宇宙の中心たる日輪を以て、尊敬の意を表して居る。み名に依つて現はされたる如く、この御神は、生産の大能力を有つて居られる。古事記にも千五百座まします御子とある様に、八百萬の神々は何れもこの神の御子孫で、今日耳目に觸るゝ事も物も、一切はこの神の産まれたものである。勿論天御中主之神は宇宙の主宰神であるから、天上天下一切の事を知しめされて居るが、然し自ら御活動はされない。易の太極は動かす専ら陰陽が變化して五行を生ずる様に、御中主之神は動き給はず。左右にありて、之を補佐する産靈の兩神が、盛んに活動して、天地を經營されたのである。拾遺集にも「君見れば、むすびの神ぞうらめしき、つれなき人を

何つくりけん」とある。之を見ても産靈の神の御高德は分る上代の人は是程迄に産靈の神の御力を認めて居た。

扱て産靈神が第一に産まれたのは、宇麻志阿斯訶備比古遲神である、この御神は天津國を治められて天の常立神と云はれる天之常立神に對して、國津神として、皇室の正しき御先祖に當らせらるゝみ神は、有名なる國常立之命である。かくしてこの兩神に依つて、天上天下が統治されたのである。その後、宇比地邇之神と須比知邇神女神が配偶されて、角機之神、活機神、大斗能地神、大斗乃辨神、游母陀琉神、阿志古泥神等を産まれた。天御中主之神より、阿志古泥神に至る迄を、天津神十七神と云ふ。阿志古泥神の御子に有名なる伊邪那岐、伊邪那美の命が生れた。

七、天の浮橋

伊邪那岐、伊邪那美の兩神は、天つ神の命せを畏み、天の浮橋に乗られて降りられた。天の浮橋は、一名天の磐船とも云つて、雲の波路を分けて上下する頗る堅牢なる船である。この浮橋にお乗りになつて、お降りなされた。空中へ船をお停めになつて、遙か下の方をご覽すると、蒼波渺々として極る所を知らず、國土のありとしも見えない。試みに天の沼矛を執られて、海中を搜ぐられたが、その滴りが凝り固つて、おのころ島が出来た。そこで取り敢えず、この島へお降りになつて、この島で鷓鴣にならうて、夫婦の契りを籠められ、遂に大八洲を次ぎ／＼に産まれた。兩神は、鴛鴦の仲らひいと睦じく、數多の御子達を生まれて、共々に國土の御經營に當られて居た。或時女神が火のみ子を生まれるを耻ぢて、遙々と黄泉津國へ行れた。黄泉津國とは、夜見の國、根の國、夜の國などと云つて、大八洲よりも遙か下の方に當り、汚穢いもの集つた所である。本居

翁などは黄泉津國を以て死後の世界冥土の様に解されて居るが之は黄泉の字義に食はれたもので冥土といふ様な適確な意味で用ゐてはない。若し冥土とすれば一旦黄泉國へ行かれた伊邪那美命が其後度々本土へ歸られたのも可笑しい私見に依れば茲に黄泉津國と云ふのは黄泉の様に忌な所といふ位の意味で軽く比喩的に用ゐられたもので決して冥土を指されたものではあるまい。又根の國夜の國など云ふと如何にも地下にありげにみゆるが元來上代に上とか下とか云つたのは幾何學的の上下ではない。上とは善いとか尊いとか云ふ意味下とは悪い賤しいといふだけの事である。こふ云ふ工合に考へると伊邪那美命が根の國へ行かれたとあるは當時の政治的中心地よりはなれて遠島へ行かれた位の事であらう。之は何も男神からの命ではないが大和乙女の特色とも見る可き貞淑の心から自ら耻ぢて心細くも遠島へ

鹿島立たれたのである男神のみ心では素より女神の普通ならぬ忌はしき火のみ子を産れたのを腹立たしくは思つて居られたが然しそのために最愛の女神を聞くだに恐ろしき黄泉津國へ追ひやらんなどとは毫も考へて居られなかつた。

女神が目のあたり黄泉津國へ行かれたのを見て怒氣心頭に燃えて、暫くも静かなる能はず直ちにみ後を追ふて黄泉津國へ行かれ直ちに女神に會はれて聲荒らかに「一日に千度びくびり殺さむ」と云はれた一日の中に千遍も縊り殺してやろうぞと仰せられた下世話にも云ふ可愛さ餘つて憎さが百倍今はもふ男神の全身は憎しみのために燃え立つて居られる男神の猛り狂はれるを見ては流石に女神も後悔せられて千五百の産屋建てむ」と云はれた。それなら直様幾千の産屋を建て、身の穢れを淨めまずから何うか今迄の罪は許して下さいと云はれた。

このみ言葉の中にも如何にも女性の優さしさが現はれて居る産屋と云ふのは、上代産婦が分娩の前後四五十日も籠つて一切の穢れを清める所である。今でも越前の遊行といふ土地には、この産屋が一つ丈残つてゐるさうである。このみ言葉を聞かれて燃え立つ心も少しは和いだすが、然し黄泉津國が評判以上穢いのに恐れて一刻も早く茲を立ち去らんとして種々女神を誘ふたけれど、どうしても女神は出やうとしない仕方がないから、それでは單身茲を通れやうとした、一目散に逃げ出したが之を見た黄泉津國の醜女どもは、逃しはせじと後からドシ／＼追ふてくる手當り次第いろんな物を投げつけるから、その危なさ、その恐しさ、何とも例へやうもない有様であつた。然し左右の勇將は神前に立ち塞つて交々防ぎ戦うて、やつと黄泉津國を出られたのである。之から考へても、神代の神々が如何に清潔を尊び不潔を忌み嫌うた

かが分る。殊に女性は月華などの關係から、餘程穢いものとせられて居たのが分る。この事あつて以來、兩神の仲らひ何となく疎ましくなり、男神は上津國を治められ、女神は下津國を知しめし、兩神は之より天涯地角幾千里をへだてて對立する事となり、再び手を握られる事はなかつた。

八、日の女神と月の男神

伊邪那岐伊邪那美の兩神には、數多のみ子達がおはしたが、中でも人格の格の一際勝れたのは、天照大神、須佐之男の兩神であつた。この兩神は御姉弟の仲であつたが、御人柄は全く反對であつた。天照大神は諸神の中でも首座を占められるだけであつて、御賢明に渡らせられるは素より御徳望も十二分に具はり、御性格も圓滿無碍にて、殊に女性で渡らせらる

だけ、御言動も優にやさしく、日本女性の理想と仰ぐ可きは素より、その御効績より云ふも確かに日本第一の御英傑にましく、たる事は明らかである。須佐之男命は生れ乍ら雄偉の御體格と萬夫不當の力量を有し給ひ、才幹もをさく、姉君に劣り給はず實に大英雄の御天品であつたが、惜むらくは御性の燥急粗暴におはして、才に任せ、勇を恃んで、時に亂暴狼藉に及ばるゝ事も稀らしからず、實に白玉の微瑕として諸神の惜み給ふ所であつた。殊に天照大神に於せられては、御弟の御素行を常々より、太く心に懸させ給ひ、機に臨みて、いろく御意見御訓誨もせられたけれど、何さま血氣の勇に逸らるゝ命の事とて、少しも姉君の言を用お給はず、益す御狂暴の數々を盡されたので、流石に御我慢強い姉君も、遂に並々ならず憤られ、お二方の間は、義絶同様の有様となつた。

須佐之男神の亂暴は、實に無邪氣なもので、決して何の悪氣があつて

爲されたでもない。全く小供の惡戯のやうなもので、思はず微笑まるゝ節が多いかの有名な天の斑馬の皮を姉君の織屋へ投げたり、其他數々の穢いみ仕業を爲されて、切りに姉君を困らされた、之は素より悪いには相違ないが、然しその惡戯は何所迄も無邪氣である。上古の神々は、何れも大概この様に無邪氣だつたらうと思はれる。遂に和睦はせられたけれど、父君は須佐之男神の性質を見抜かれて、かゝる刑を永く天上に止め置く可きで無いと、遂に須佐之男神を夜見之國におやりになる事とした。夜見之國には、曩に母上伊邪那美之命が行かれて居る。須佐之男神は、事實、母上の御跡慕ひて行かれた事になつて居る。日本では古來實例の示す所に依つて、女の子は父親に親み、男の子は母親になじむ事になつて居るが、この傾向は、已に神代よりあつたものである。天照大神は父なる伊邪那岐之神が大變に愛せられ、ご自分と共に天津國

を治めしめられ、専ら日輪を知しめられたのである。須佐之男神は母神伊邪那美之御秘藏子で、ご自分と一所に夜見之國を治めしめ給ひ、専ら月世界の事を知しめす事になつたのである。伊邪那岐伊邪那美兩神が、天上天下に分れられたる如く、天照大神と須佐之男神とも天地上下に分れられ、天照大神は天津神として天上の事を知しめされ、須佐之男神は國津神として國土の事を知しめされる事となつた。

九、杵築の宮

須佐之男神之御經營になつた夜見之國は、一説には確か朝鮮の事だと云ふが、私見に依るも、多分その邊だつたろうと思はれる。須佐之男命には八十柱の御子があつたが、中にも、大穴牟遲神が一番勝れて居られたので、須佐之男命は八尋矛を授けられ、本土の御經營をお托しになつた。

た。そこで大穴牟遲神は、後高加茂に祭られたる、杵高彦根命と後諏訪に祭られたる、御名高命を引き連れられ、遙々出雲の國へ行かれ、此所を本據として、大いに本土の御經營を爲されたのである。この時分の大八洲は伊邪那岐神之御經營に依つて、土地の開発など大抵は終んで居たが、大穴牟遲神は、更に醫術や方術などをお擴めになつて、いろ／＼人民の便利をお計りになつたので、御徳望は隆々として大八洲を壓し、眞に王者の風があられた。數多の御兄弟達は、この神の意外の御出世を見て、中には嫉み心に驅られて、いろ／＼妨げをされる神々もあつたが、父君の須佐之男神が、夜見之國から直接間接に御助力になるし、臣下も身を捨て、御護り申したので、何の災難も起らず、いと安らかに大八洲を治められた。この神こそ有名な大國主の命で、御功績も多く従つて、御名前も數多あつたので、大名持の神と呼ばれた。このみ神は、遂に出雲の杵築へ

祭られて、世の幽事隠れたる幽冥界の事、現世の政治に對して冥府の政治を云ふを治められる様になつた。出雲の大神といふは、このみ神の御靈の鎮りまします所である。

十、三種の神器

天照大神は伊邪那岐神の仰に依つて天津國を治められて居たが、一たび須佐之男神と有名なる「玉と劍の誓」をせられて正哉吾勝々速日天之忍穗耳命を産まるゝや、大神はこのみ子に向はれ「葦原の中つ國は我が子孫の所知食すべき國なり」と仰せられて、忍穗耳命に命せられて大八洲の統治を任せになつたが、然しこの時大八洲には、大國主之命が居られて、己に如何ともする事が出来なかつたので、まづ當分はその儘天上にお止りになる事とした。そのうち忍穗耳神は高皇產靈命の御女

萬幡豐秋津師姫命の御子玉依比賣命と配偶せられ、天邇岐志國邇岐志天津日高日子彥能邇々藝命を産まれた。この御子は天照大神の御孫に當らせられるので、皇孫命と云はれる。この御子の御代となつて、愈々大八洲へ御降臨遊ばす事となつた。然しこの事はナカ／＼匆卒に決めれるものではないので、天照大神は、八百萬の神々を神集へに集へて、いろいろ御計りになつた。意見は區々であつたが、大多數は開戦論で、大八洲には、大國主之命が居られる。御統治になつて已に數十年を経て居る。其所へ突然御降臨になつて、大八洲をお取上げになるから、到底尋常の手段ではお渡しにはなるまい。是非共強い神々を數多引き連れられて、用捨なく御征伐遊ばすが宜かろうと云ふ。この時思兼命といふ、非常に知惠の逞しい神は、黙り込んで、何か一心に思案に暮れられる風である。から、天照大神は、思兼命を側近く召されて、何かよい思案もがなと問はれ

ると思兼命は答へて曰はるゝやうさればに候ふ軍兵を遣はして御征討になれば皇軍の勝利疑ひなからんも左迄慌てゝ味方の損害を招かんとより是は寧ろ和らかに談合して平和の裡にお取り上げ遊ばすが第一の手段でゐると流石は思慮深き知恵の神だけあつて是は又格別の意見そこで大神はこの意見に従つて取り敢えず天穗白命を使者として下し給ふたこのみ神は非常に忍耐力の強いお方であるからこふ云ふ使者としては確かに適任であつたが然し餘りお氣が長いので三年も居るうち何の要領も得る事が出来なかつた之ではならぬと續いて天稚日子を遣はされたがこのみ神は才智秀でゝ萬づ齒切れのよい神であるが大八洲へ着くと同時にあらぬ邪心が起つてこふして犬骨折つて鷹に取られるより寧ろ自分に横領りしやうとグヅ／＼して五年も居るうち甘く大國主命に取り入つて遂に命の息女下照姫を娶つた

第二の使者もそれなりけりて音沙汰が無いので事茲に至れば平和一方でもゆくまいと今度は武勇絶倫と云はれる武甕槌男命と共に經津主神を遣はされた今度は餘程強硬な談判をされたので遂に大國主命も我を折られて一つの條件の下に事なく大八洲を天孫に御渡しになる事となつたその條件といふのは大國主命のために出雲の國へ天皇の宮殿と同様の宮を造つて自分は天の下の幽事のみを知しめたいといふのである何も大した難かしい條件ではないので直ちに之を納れられて出雲國多藝志の小濱といふ所へ嚴く大きく宮造りして大國主命の御殿とした之が有名なる杵築の宮で今の所謂出雲の大社である茲に至つて現世の事は天孫の知らしめず處となり來世の事は大國主命の知らしめず所となつた今日出雲大社を縁結びの神など云ふは飛んでもない間違ひで眞實は幽冥界の事を司る所である

いよ／＼天孫が大八洲へ鹿島立たれる日になると、天照大神は三種の神器、即ち草薙劍八尺瓊曲玉御鏡、是等三くさの寶物を、手づから天孫に渡され、さて宣られた。

〔豊葦原の水穂國は吾子孫のつぎ／＼知ろしめす可き地なり、汝皇孫行きて知ろしめせ、この鏡は吾子孫繼々にもはら吾靈として、我を見らる如く齋い祭るべし。〕…寶祚の隆昌、天壤と共に無窮なるべしと。

御付き添ひの神々は、中臣藤原の先祖天兒屋命、忌部家の先祖天太玉命を初めとして、信州戸隠に祭らるゝ、天手力雄命、伊勢の外宮に祭られ、朝夕の食事を司る豊宇氣畏賣命、門口を守らるゝ、神天戸別神、その他尙數多の神々を召しつれられ、天の浮橋に乗られ、今日の大祓にある様に、天の八重雲を稜威の千別にちわきて、濛々として波濤の如く湧き上る白雲、黒雲を天孫の御威光を以て押し別け／＼下られた天孫その日の

いで立ち、脊に天の石鞆を負はれ、天の眞鹿兒矢を手挟み、天の梶弓を持たれ、威風堂々として、日向の高千穂の峯へ降りられた。この峯は今日の霧島山である。天孫がこの山へ下られると、直ちに猿田彦神が迎へに出られた。其時非常な霧で、一寸先が見えなかつたので、この霧を稲の穂で拂はれた所、忽ちにして霧が晴れて、麗らかな天日が現はれたといふ不思議な事には、今でも霧島山には自然生の稲が生えるし、どんな大霧の日でも、稲の穂で拂へば、屹度霧が晴れるといふ、天の浮舟の着いた所は、播摩丹後の境であるが、今でもその古跡が見られるといふ事だ。

十一、大八洲御經營

方々の地理を御覽になつた末、遂に吾田笠狹の御崎なる長屋の竹島といふ所に都を定められ、國津神の御女木花開邪姫と御夫婦の固めを

なし給ひ、御代萬歳の基をなし給ふた。この邇々藝之命こそ、正しく皇室の御先祖に渡らせ給ふのである。邇々藝之命は大國主之命より八尋矛を御請取りになると同時に、大八洲の統治權を全くその手中に收め給ひ、土地の開拓と人民の教化とに全力を盡し給ふた。次に立ち給ひし御子は、御名を天津日高日子穗手見命と申されたが、この御方は綿津見の神の御女豊玉姬命と婚せられ、御子日子波限建鵜草葺不合命を産まれ、このみ神は海神の弟姫玉依姬命を娶られ、神倭伊波禮毘古命を生まれた。この命こそ有名なる神武天皇である。この命のみ代になつて都を大和へ移された。その途中従はぬ夷共をお討ちになり、殊に長髓彦などいふ豪族を亡ぼされるためには、随分困難な戦を重ねられた。

神武天皇は、歴史上人皇としてあつて直接神代と關係はないが見様に依つては、神代御經營の最終とも見る事が出来るから、次に御事業

の概略を茲に擧ぐる事としやう。神武天皇は早く東北一統の策を定め、日向の宮を發し、暫く九州の北部に鎮り給ふたが、それより海を渡り、道を山陽に取り、安藝の國に坐す。事七年、安藝より東して吉備の國に坐す。事八年、吉備といふのは、今の三備地方である。この間に兵糧を蓄へ、兵船を造り、遂に海路より大和地方を指し、河内の海岸に着き給ふた。

官軍は河内より上陸して大和の方に進んだが、長髓彦と云ふ酋長兵を率て來り戦ひ、官軍大敗北の止む無きに至つた。天皇地理の不便なるを見給ひ、乃ち軍を引き、元の海岸より南に向ひ、まづ紀州に打入られた。紀州の豪傑高倉といふもの、官軍を助け、沿道の賊みな平らぎ、官軍東に廻りて伊勢より大和へ攻め入つた。

大和の南の境は、人跡絶えたる山々で進軍容易でなかつたのを、日臣命先陣を承り、道路を開きて、遂に大和の宇陀に達した。天皇大に賞し給

ひ之より道臣と命じ給ふた。大和の會長等或は降り或は誅せられ官軍日々に勢を揚て遂に長髓彦に迫つた。

初め河内路の戦ひに、皇兄五瀬命長髓彦が軍の矢に中りて薨じ給ひ、紀州の海にては、亦皇兄二人難風に逢ふて没し給ふた。天皇世に口惜しく思し召し長髓彦を怨み給ふ事殊に深く我は忘れじ打ちてぞ止まむと返す。悲歌慷慨し必ず之を滅さん事を誓ひ給ふた。既にして饒速日命は長髓彦を殺して歸順し、その他會長土蜘蛛等何れも誅せられ大和地方全く平定した。茲に於て都を畝傍山の麓なる橿原に定め、萬世不朽の基礎を固め給ふた。抑も大和は所謂青垣山籠れる國で、四方の山山天然の城廓をなし、その位置は殆ど帝國の中央にあつた。この時東北の諸國未だ王化に霑はなかつたけれど、天下一統の形勢は實に茲に成就した。さればこの時を以て我が帝國の始めとなし、此年を以て紀元第一

一年とし、この天皇を以て、歷代天皇の第一代と數へ奉つたのである。諸事已に整頓したので、天皇詔りすらく「今諸虜已に平ぎ海内事無きは畢竟皇祖の威徳に由るものなれば、宜しく神靈を祭り、孝行を盡すべし」と乃ち祭の庭を作りて躬ら皇祖を祭り給ふた。是より後、歷代敬神の教を繼ぎ給ひ、天下の人民皆神威を畏れ敬つたので、朝威従つて重く天下太平に治つた。抑も上古の人は簡易質朴にして、動もすれば強暴無道の行をなし、且つ朝廷に對しても、吾々の如く數千年の恩義ある譯でも無い。しかも猶王室を敬愛して、敢て逆はなかつたのは、蓋し武威の盛んになると、仁政の厚きとに由るなれども、歷代敬神の教へが人民を教化せし功も亦多かつたのである。

十一、神道の根本

佛教では真如と云ひ、基督教では上帝と云ひ、儒教では道といひ、又天と云ひ、道教では自然と云ひ、陰陽家は之を太極といふ、その名前はいろいろ違つて居るけれど、是等はみな宇宙の主宰者、造物主を指したもので、彼等の神とする所は絶対唯一の最高權威者を指したものである、然るに日本の加美と云ふのは、決してそふした絶対のものではない、元來神道の神は上である、上とは善良高貴優美等總て普通の水準に比して卓越せる事物をいふのであつて、日本の神といふのは、要するに何にもせよ卓越せる品質に付したる名稱である、善い人、惻かな人の神なるは素より、惡漢でも、奇人でも、技術者でも、魔法使ひでも、兎に角平凡ならざるものは總て神である、即ち天津神は善の神で、禍津神は惡の神である、唯に人間の神なるのみならず、禽獸魚介山川草木は素より、一掬の土一粒の砂にも、亦神性がある、要するに如何なる事物でも、苟くも績のある

以上、必ずや神性はある、唯その神なる部分の多いもの程、高貴なりとしてある、即ち神道の學說に従へば、天上天下のもの、一として神ならぬはない、ただ之に等級があつて、最高の天御中主神を中心として、それ以下に無限の差別があるのである、それ故吾人は努力向上して現在の神より漸次高級の神に經上るべきだと説いてある、佛教、基督教に於ては神を唯一のものとして、神人の區別を明らかにせるに反し、神道に於ては一切を神とし、神たるの點に於て、萬物を平等に觀て居る、この點は餘程希臘の汎神論、即ち萬有神教に酷似して居る、或點に於てはスピノザの分子説に似た所もある、之は非常に面白い所であつて、神道が教理としても、他宗に比して獨特の地位を保つ所以である。

神道に於ける統一、主宰神は、云ふ迄もなく、天御中主神である、この大神は宇宙の中軸にあつて、一切の自然系統に程よき調節と、是等の活

動の力をそれ／＼に與へ給ふのである。大神の次位にあるを産靈の神
 といふ。この神は生と活動の神で世の中に事物の生育するは何れも此
 神の御仕業である。自然界が今日見る如く進化發展するのは總てこの
 神の御活動の結果である。この神は實に宇宙活動の本源である。産靈神
 に次いで貴ぶ可きは即ち日の神である。即ち日輪である。日輪の體現さ
 れたる天照大神である。元來日輪は自然界に於ける火氣陽氣の凝集せ
 るもので、之れあるがため、自然界に生きとし生けるものは無事存続し
 得られるのである。かくも貴いものであるから、我が國に於ても、日輪を
 崇拜する事甚しく、萬物の靈長たる人類を呼ぶにヒト即ち日止を以て
 し、火氣の集結して人體をなせるを知らしめ、その生存を生きる即ちヒ
 クルと云ひ、火氣の來るを現し、死亡を死ぬる即ちヒヌルと云ひて、日
 去るを示して居る。古代日本人の考へでは日の去來を以て、生死現象の

淵源と見たのである。

人によれば、神道を拜日教と稱ふのものもある程に神道に於ては、日
 の尊嚴を説いて居る。今日でも黒住教其他の宗派に於ては、朝日に向つ
 て禮拜し、一種の深呼吸をなし、陽氣を胸腔に吸入する事を勉めて居る。
 神道では又氣息を貴び、氣の流行といふ事を説くのである。神道の哲
 學に従へば、凡そ天地に變化活動のある所以は、宇宙に絶えず氣の流行
 が行はれるからだといふ。若し宇宙が唯一の實體で、實質的に充滿して
 居るものならば、一升徳利へ一升の酒を充めたる如く、到底活動の出來
 さうな事はない。世界に活動のあるのは天地間に空虚があつて、その間
 を大氣が流行して居るからだといふ。佛教では活動を風波の比喻で解釋
 するが、然し之は佛教としては矛盾たるを免れない。何となれば佛教の
 説く眞如なるものは、六合に充足せる一定體である。即ち一升徳利へ一

升の酒を入れたものである。已に些の間隙もなく充滿したものに、何うして波が起るか、變化が起るか、波は風に依つて生じ、風は水上の空虚に起るものである。已に空虚の無い以上到底風波の起り得る筈はないのだ。

神道の先達になると、この氣の流行を見るのである。山に行けば山の氣を見、川に行けば川の氣を見る。人に向へば人の氣を見、樹に對すれば樹の氣を見る。是等氣の流行に依つて、將に起らんとする變化を豫言する事が出来るのである。

神道は人體組成の要素を以て、地水火風の四大に歸して居る。之は佛説と同じであるが、決して彼説を借り來つたものではない。全く暗合である。平田篤胤翁などもこの説を確く信せられたもので、人間は生くる間は日光と空氣を吸収して死すれば水と土とに歸するに非ずやなど

云はれて居る。

天地開闢の太初に當り、世界は混沌として、鶏卵の黄味を流したる様であつた。未だ人と物とは出來なかつたが、他日人と物となる可き理を含んで居た。理と云ひ道と云ふと、何だか人類とかけ隔つて居る様に思ふが、然し道は元來人間固有のものである。即ち道は天に在つては神と云ひ、人にあつては心といふ。心は神明の舍なりともいつて、人心の奥深い所には神が住んで居るのである。この點より云は、神人は一如である。それならば神は人體の何所に居られるかといふに、神は心臓に居られる。今五臟を五行に當てると、肝臟は木、脾臟は土、肺臟は金、腎臟は水である。そして心臓は火である。温い心臓の火の中に神明は住んで居られるのである。今神社の丹塗は、心臓の火を現はしたもので、神明のお住居は心臓だといふ事を示して居る。神殿許りでなく、あけの玉垣など云

つて、玉垣の眞赤なのもあれば、又稻荷の鳥居の様に眞紅に塗り立てたものもある。

一心は神明の住居であつて、一心より天地は開くるのであるから、神を知らんとせば、必ずまづ心を知らなければならぬ。然るに心には體と用とある。心の體は寂然不動で音もなく、香もないものであるが、其用は所謂感じて通するもので、忠と感、孝と感、種々の情操となるのである。それなら心の如何なる状態に於て神は宿るかといふに、心の作用が中庸を得て、かの天地陰陽の分れざる時の如く、喜怒哀樂の未だ發せざる時である。かの赤兒に神の宿るといふは、赤兒は喜怒哀樂の極端に走らず、常に中庸に近き精神状態にあるが故である。

神道には人間の生成を次の如く解して居る。陰陽合して、陽は男たる命を盡し、陰は女たる命を盡し、一滴の白露、その感する時に應じて、天より性を降し、其感する所に從つて形體を作るとある。この説に従へば、人間の性も、心身も、悉く神の造る所であつて、父母は唯その機械たるに過ぎない。

十三、神道の未來觀

神道は現在教たるの點に於て、他の宗教に見得べからざる一大特色がある。素より未來の事も論ずるが、之も決して佛教や基督教などの様に重視しない。唯今日に對して明日といふ位の至極軽い意味である。例の平田翁なども、神道の現在主義を讚美して、外つ國の説の入り來らざりし前の世人は、大らかなりし故に、かつて魂の行方などの事は、さだせざりし事になむなど、云はれて居る。又曰ふ、冥府といふは、このうつし國を措きて、別に一所あるにもあらず、直ちにこのうつし國の内、いつ

こにも有なれど」と云つて天地間何所を尋ねても特に冥土といふ世界のある譯ではない冥府は眼前にある唯吾人の心眼鈍くして之を見得ない許りである。

萬葉集に「百足らず八十の隈路に手向けせば過ぎにし人にけだし逢むかも」とある歌の意は曲り曲つた道の奥の方を向いて詣つれば死んだ人にも會へるかも知れないといふ事でこの歌に依つてみるも上代の人が冥府を以て幽暗な物蔭にでもあるやうに思つた事が分る。神道では塚なり社のある所に靈魂の宿つて居る事としてある齋明天皇の崩御に就いて朝倉の社を造營した時下の様な祭文がある「あさもよし木の上宮を常宮と定めまつりて神ながら安らげく坐しぬ骸を隠しては又この魂を鎮むる」とある又仁徳の朝上毛の野君田道といふが蝦夷との戦に空しく戦死してその骸を蝦夷の地へ埋めたが後年蝦

夷人が之を堀り返した時彼の死體は一匹の大蛇となりて現はれ蝦夷人を喰ひ殺したと云ふ田道の靈魂が蝦夷を怨み憤るの餘り大蛇となりて現はれたのである又靈魂は必ずしも塚や社の所許りに現はれるのではない例へば履中天皇の御寢所へ筑紫に鎮りませる三柱の神が現はれた故事もあれば又葛城の一言主神は雄略天皇の山狩りの場へ現はれて帝と一所に山遊びしたといふ傳説もある。

死して後靈魂は天津國へ上つて混沌の宮に歸るとしてある詳しく云へば元來人間は天御中主神の分御魂であるから死すれば體は土となれども靈魂は御中主神へ歸り大神の中に攝取せらるゝものだとしである又平田翁などの説に依ると死して後も親しい魂友達同志の魂は何れも一所にかたまつていろ／＼ありし世の様など面白おかしく打ち語ふものだと云つて居られる例へば平田翁の魂なれば天上して

後も本居翁の魂と一所に、神道や國學の物語などして、樂しく暮すなど
 と平田翁自身書いて居られる。親しい魂の集る一例として平田翁は次
 の話を擧げて居られる。之は古事談に出て居る話であるが、右馬頭顯定
 朝臣は常に中院右府と會合して、多年隔心なく交つたが、右府誓約して
 曰く「夢後と雖願ふ所は、墓を並べて談合變る事なからむ」と、兩人の死後
 その墓の近邊には、果して怪異の事が多かつた。雨夜の深更など、笑ひ興
 ずる聲が手に取る様に聞えたといふ事である。
 神道では未來を説かぬではないが、然しその特色はといふと、總て現
 在に安住して、未來の事を念頭にかげざるを以て、本色とするのである。
 神道では未來の安心なくとも、現在の安心があれば結構だといふ。本居
 宜長翁も、この安心無きぞ我が古道の安心なると云はれて居る。之は面
 白い言葉だと思ふ。最も明快に神道の特色を道破されたものである。神

道は古いとか、現代人の胸に何の響をも與へないなど、云ふが、神道程
 現代的な宗教はない。その樂天的、積極的、膨脹的、政治的色彩の尤も顯著
 なる所多く、未來に言及せずして、現在の修養と快樂とを鼓吹する所、こ
 の宗教程現代式な宗教はない。それ故神道の教旨を深く體得すれば、現
 代的大成功を得るは疑ふ可からざる所である。
 然し半可通の神道家などのうちには、平生は大言壯語して居るけれ
 ど、一朝老衰して、死神に見舞はれた時は、直ちに佛法に歸依するものが
 多い。從五位家隆卿は、隨分熱心な神道信者であつたが、死の病床に臨ん
 で、遽かに彌陀の本願に歸り、念佛を唱へた。彼は臨終の際にこふ云つて
 居る「斯ばかり契りまします阿彌陀佛を知らず、悲しき年は經にけり」と、
 何といふ腑甲斐ない弱音であろう。
 之とは反對に、伊勢の貞丈といふ熱心な神道家は、臨終に際し、方々の

僧侶が阿彌陀に歸依せん事を慫慂して止まなかつたのを手きびしく
 退け三種の和歌を作つた何れも嘲佛尊神の痛快極るものである昔よ
 り佛の道を崇るは心愚かに愆ふかき人彌陀佛の迎ひ來るとは紫の雲
 を使の類ひなるらむ常ならぬ世を嘆くこそ愚かなれ移り變るは天地
 の道

神道の未來觀を誌した次手に靈魂の事を一言しやう神道では靈魂
 の事をタマと云ふタマとは圓といふと同じ意味で圓滿自在妙不可思
 議の義である魂を貴ぶの意より高貴なるものには多くタマの字を付
 ける寶玉をタマと云ひ命をタマノオといふかくも貴ぶ可きタマは如
 何にして人間の骸に入り來りしかと云ふに之れは父母媾合の際天御
 中主神より分けみ魂と云ひてその大靈魂を分かち與へられたもので
 ある本居翁はタマを火に譬へて居られる地上の火が太陽の火を借つ

て燃える様に人間の靈魂も神の靈魂を分けられたものに相違ないそ
 して火は幾ら分けても本火の滅らないやうに神の靈魂は幾萬人に分
 けられても決して神のミタマの滅する様な事はないのだと死後靈魂
 の分らなくなるのは決して滅する譯ではない之は丁度火を遠くへ持
 つて行たやうなものでその火光が薄くなつたのである茲になると神
 の靈魂は廣大無邊のもので如何に遠くへ行かれてもその火光は今日
 でも明らかに見得るのであると靈魂を火に喩へたのはナカノ面白
 い殊に死ぬるといふ事は即ち火去るで火の消えるではなく火の遠方
 へ行くのだといふは穿ち得て妙を極むる
 靈魂には善惡大小がある善なる魂は善神の幸ひする所即ち善神の
 幸魂で惡なる魂は邪神の幸ひする所即ち邪神の幸魂である平田翁
 の云ふには親鸞や空海などの靈魂は頗る奇怪を極めたもので禍津神

の幸はふたもので、彼等の爲したいろ／＼の法術、例へば咒文を唱へて、石臼へ目を立てたなどいふは、是れ皆禍津神の仕業だと云はれて居る。魂には實に無限の階段があつて下級から上級へ絶えず進歩發展をなしつゝあるのである。各人の修養に従つて、靈魂は漸次大きくも固くもなりまさるものである。今迄は遙か上の方に仰いで居た先輩なども、何時の間にやら同等となり、遂には遙か下の方に見下す様になるのである。之は丁度登山するものが上るに従つて次第に周囲の低く見えると同じである。この事は平田翁も「古神道大意」の中に繰り返し／＼て曰はれて居る。神道を得なかつた前迄、孔孟を又と無い大人物の様に思つて居たが、今となつては、孔孟や釋迦など遙か眼下に見る様になつた。彼等を冥府から呼び起し、篤胤の机邊に列坐せしむる事が出来れば、一々彼等の説を説破して、神道の有難さを知らすべしなど、罵て居られる。

要するに神道の未來観、靈魂観は頗る樂天的であり、又淡泊である。神道には因果を説かず、従つて地獄、極樂のやうな報償的な假定説を立てない。唯もとの混沌に歸るといふ神道の性質が大體淡泊なものである。から、その未來観もあつさりとしたものであるが、その淡泊の中に、又云ふ可からざる味もあるのだ。

十四、神道は實事的宗教

宗教や道徳といふと、何でもその中に理窟や教訓が無ければならぬ。事の様に思ふが、之は狭い考である。何も佛教や儒教の様に現はに教訓はしなくとも、その示せる實例に依つて國民を指導し、教養する事が出来るならば、之は立派な宗教道徳と云つてもよい。我が神道の如きは、その中に決して理窟として理窟の出で居るでもなく、又教訓として、教訓

の出で居るでもない。神道の僅かに誌せる所は、神代に於て神々の行はれたる實事である。

道の道とす可きは眞の道に非すと老子も云つた様に、味噌の味噌臭きは眞の上味噌ではない。どんなに巧妙な理窟でも教訓でも教訓や理窟には限りのあるもので、廣大無邊の大眞理は、決して生小賢しい教訓などで云ひ盡せるものではない。又教訓といふものは、得て嫌味に陥るもので、誰しも小うるさい教訓などを喜んで聞きたがるものでない。教化力から云つても、實事實例の方が、いくら教訓より愈るか分らない。教訓で千萬言を盡さねばならぬ事でも、之を實事に示せば一言で足る。元來支那や印度は、理屈の本場で何かといふと、直ぐ教訓や理屈が出る。それで忠孝といふことでも、支那の方にはこの爲に書いた本が、いくらあるか分らない。汗牛充棟も當ならぬといふ有様である。これ位本があり、

理屈や教訓が行き届いて居るから、支那には古來何れ程忠臣孝子が出たかと調べてみると、之は又意外の意外、忠臣所の騒ぎではない。支那には昔から薄情な奴許りで、君主を弑害する逆臣もあれば、皇位を篡奪する奸雄もある。臣下で居乍ら、不臣な眞似許りして居る現に、先年の清國革命でも分る。苟くも數百年來愛親覺羅氏の粟を食んだものが、あの様な不様な降参が出来るか、表面は兎に角、事實上彼等は袁の手先となつて、清の皇室を賣つたではないか、言ひ様もない不忠漢である。こんな不忠漢でも、一度び筆でもとると、滔々數千萬言立派な大忠臣論を書くのである。要するに彼等は、口先き許りの大忠臣で、少しも誠意がない。我が國は之とは正反對に、古來大忠臣論もなければ、又大孝子論もない。然しその事實は、歴代を通じて國民が實行して來た所である。忠孝以外の道徳にしても、組織立つた道徳論は無いけれど、その事實は確かに存して

居る。

詞華盛んにして實意薄しと云ふが、餘り能辯な國民に實行の伴つた例はない。日本は古來不言實行を以て、その國是となし善と信ずる所は黙つて居て着々實行し來つたのである。流石に孔子はこの道理を觀破したものとみえて「我れ之を空言に載せんと欲して之を行事の深切著明なるものに見はずに如かざるなり」と云つて居る。又我を知るものは春秋のみと云ひ、我を罪するものは其れたゞ春秋かとも云つて居る。孔子は生涯澤山の著述を残したが、一番得意なものは唯春秋であつた。それなら春秋はどういふ書物かといふと、春秋は先王の行事を採録したもので、悉く實事のみである。實事の教訓に愈るは、孔子の此一言に依つても分るであらう。

繰り返して云ふ、眞の道は事實の上に見るもので、決して教訓ではな

い教訓は實事よりは遙かに下等なもので、實事あれば斷じて教訓は要らないのである。前述の如く支那などで、あの位忠義の講釋が盛んなに關らず一向忠臣の現はれないのは、支那といふ所は古來忠臣の實事が乏しいからである。日本には、忠臣の教訓は少いが、實事には非常に富んで居る。楠正成の話や赤穂浪士の仇討など、實に絶好の實事である。吾人はどれ位大義名分の議論を聞かされても、大して感奮も感激もしないけれど、一度び四十七士の討入の話や、忽ち感激して大義名分の觀念が油然として起る。この事實は實に百載の下儒夫をして起たしむるの概がある。實事の教訓に愈るは、最も明白の事實である。

老子も云つたやうに、大道廢れて仁義ありで、世界各國どの國でも道德の頹廢した時に、種々の道德説が、今更の様に喧ましく論せられるものだ。之は何故かと言ふに、何時の時代でも善い方面の實事が乏しくな

ると國民は何だか不安で、心淋しくて、自分等の權威を失つた様に感じ、
 て實事が急に現はれるが困難であつても、之に代る可き教訓を要求し、
 この教訓を以て實事の缺陷を補充し、強いて自ら空元氣を装ふのであ
 る現に孔孟の仁義なども春秋戰國の際に生れたもので、この時代が救
 はれたかといふと、決してそんな事はない國民を文弱に導いた罪こそ
 あれ、之がために一國の興つたといふ事は聞かない、要するに世の學問
 は一種の裝飾である、實際に世道人心を益するものは實事をのぞいて
 求む可からずである。

この點より見て、乃木大將の自及は、誠に時と所とを得たものであつ
 た、畏くも神々の末に生れし吾等日本國民、近來歐米の惡思想にかぶれ
 て、著しく輕佻浮華の風を生じ、大義大道地を拂つて空しく國粹を外に
 し、國民性を無視して、紛々たる邪教異端の時を得、顔に跋扈せる今日、こ

の類風汚習を一變し、所謂類瀾を既倒に回らすものは決して今日の牧
 師でもなく、又今日の大學教授の輩でもない、唯この際一身を犠牲とな
 して、忠君愛國の活模範を垂れ、大義名分の活實例を示すの途あるのみ。
 茲に於てか、乃木大將は起つた、彼はよく時世の變を知つて居た、今日の
 如き危急存亡の場合に處して、大和民族を大墮落の淵より救ふには、斷
 じて尋常一様の手段の能くする所ではない、この場合唯一死あるのみ、
 一死以て時難を救はんのみと、この決心を以て、彼は明治天皇御大葬の
 夜、御發引を合圖に、夫妻も共見事なる割腹をなし、古武士にも恥ぢざ
 る自殺をした、この自殺は素より一面明治天皇に對し奉る愛慕の實情
 に、出でし事は明らかであるが、又一面この男らしい自殺に依つて、忠君
 愛國の實例を一汎國民に示さんための深き思慮より出でたのである、
 吾人は國民として、將軍の如き、精忠無二の人物を無殘く死に委した

のを衷心大に悲しむものであるが、この一大實例に依つて、頽風汚俗の今日に國粹を實現し、國民をして大に反省せしめたのは、是れ實に將軍の賜である。吾人は乃木將軍に向つて衷心より感謝して止む能はざる次第である。

之を要するに、神道の精髓は、教訓主義ではなく、實行主義である。理窟や教訓で、不自然な教化を試むるを避けて、一にも二にも實事の模範に依つて、不知不識の中に、自然的の薰化をなすものである。吾人は今日の日本國民に向つて、この國粹的大精神を返へすべくも牢記されん事を望んで止まないものである。

十五、神道の荒魂と和魂

神道に依ると、靈魂に荒魂と和魂の二種類がある。荒魂と云ふのは、勇

の魂で、和魂と云ふのは、仁の魂である。荒魂は突進し、建設し、和魂は調和し、懐柔する。天地萬物が調和し、發展するのも、畢竟この二個の靈魂のお蔭である。

神道の教ふる所に依ると、荒魂に偏し、和魂に偏するものは、要するに完全なる人間とは云へない。少くとも大和民族として理想の人物は、荒魂と和魂とを併有する人でなければならぬ。花を活けたり、戦争したり、これぞ眞の大和武士で、雄々しき戦争をする傍、活花でもする様な優にやさしい心榮えのあるのが、眞に大和民族の精華で、國粹と云ふのも、畢竟之に外ならないのである。

木曾義仲の様な勇猛一向きの猪武者も、決して理想の大和武士ではなく、又平宗盛の様な柔弱一方のへろへろ武士も、決して大和魂ではない。加藤清正の如く、源義經の如く、勇もあり、又涙もある人物こそ、眞に大

和魂の權化である。

神代の神々も、自づから荒魂、和魂の二様に分れる。天照大神の如きは、和魂の最も大なるもので、その御仁慈は恰かも太陽の萬物に、その光線を注ぐ様に、天上天下のものを悉く御仁慈に靡ける。之とは反對に素盞之男神は、御勇猛一方にまし、その稜威には、青人草も靡き伏したといふ様に、如何にも激しい。素盞之男神が天上せらるゝ有様を古事記などに誌した所を見ると、全然雷でも天がける様な工合で、足もとどろどろ踏み鳴らし、白雲黒雲を掻き分けて上られたとある。その勇猛な御有様は實に嘆仰に値ひする。素盞之男神のやうな方こそ眞に荒魂の化身とも申す可きである。

荒魂の神、和魂の神又荒魂の人、和魂の人と區分的に云ふけれど、實際を見ると、こんなな截然區分的になつて居るのではない。荒魂のうちにも、和魂あり、和魂のうちにも荒魂ありといふ工合に、この二つの魂は一人の心中に無限の程度に於て混在して居るのである。之を例へば、荒魂は男性であり、和魂は女性であるが、世の中に純男性の人もなく、又純女性の人もない様に、どんな人間を連れて來ても、その性格の中には必ず荒魂、和魂の二つがあるのである。

大和魂は是等二靈魂が、丁度イ、工合に調和されて居るものである。が、調和と云つても決して等分といふ意味ではない。その割合をいふと、何うしても荒魂の分量が多いのである。優しいよりは寧ろ雄々しい性格の人が眞に大和心の人である。

皇室に於かせられては、神武天皇と明治天皇とは、大和魂の好個代表的御人物であるが、この御二方は、何れも雄々しくも御闊達の御氣象に渡らせ給ふた事は申す迄もない。臣民にあつては、楠正成、乃木大將など、

その好代表者であるが、兩人共に頑なと思はるゝ迄一向きに勇ましい性格の人々であつた。

之は大和心のうちでも専ら男性の方であるが、女性の方はと見ると、皇室では神代にあつては天照大神、人代となりては光明皇后、昭憲皇太后の方々である。是等の方々は申すも畏い事ながら如何にも御貞淑で、御温雅で、御仁慈で、神武、明治の兩帝の稜威を日とすれば、この方々の御仁徳は即ち雨の草木を潤す如く、日本女性の精粹とも仰ぐ可き御胸よりに迸り出でたるみめぐみの露に、青人草を萬遍なく潤ほし給ふたのである。

武を以て國外に向ふは、荒魂の所業である。仁慈を以て國內をなづるは、和魂の所業である。若し今、柔弱の態度を以て、國外に對すれば、徒らに諸外國の侮りを受け、又武威のみを以て、國內を治めんとすれば、一國は

決して安らかではない。要は荒魂を外にし、和魂を内につゝんで、剛柔兼ね用ゆるに非れば、到底國政は圓滿に執れるものではない。我が皇室に於かせられては、この荒魂、和魂の兼用を以て、皇祖、祖宗よりの遺訓として尊崇し給ひ、その結果として、國威は益す揚り、國內は皇室を中心として、鼓腹擊壤の聲を絶たず、萬國に比類なき理想的の政治を行ふ事が出来るのである。この道は獨り我國の國是とする所なるのみならず、之を中外に施して、愆らすで、この道は實に世界共通の大道である。之は單に國家の道徳として、有用なるのみならず、個人の道徳としても、誠に絶妙のものである。

十六、神道の樂天主義

佛敎を泣く宗敎とすれば、神道は笑ふ宗敎である。前者は厭世に傾き、

後者は飽く迄も樂天主義なる所に、その特色が存するのである。之は土地や氣候の關係もあるもので、日本の様な温帯の山川明媚なる土地に生れた人は、自づからその心も陽氣で、活潑なのは、素より自然の理であらう。

神道が笑の宗教であり、従つて日本が笑の國たる事は、神代の神々の御行跡に依つても明らかである。この事實を尤もよく證據立つるは、天の岩戸開きの神話である。神代に於て日輪の主宰神たる天照大神の御不興といふ事は、實に重大なる事件である。今日電燈が消へて闇黒になつた位の話でない。八百萬の神々の生命とも頼む日光の御本體が、突然神隠れられたのであるから、明いとか闇いとかいふ位の問題ではない。實に神々の生命問題である。そこで八百萬の神々は、神集ひに集はれていろく協議を凝された結果、天照大神の隠れられた天の岩戸の前で、

何か素晴しく陽氣な大騒ぎをして、大神の思はず、さしのぞかるゝ所を力づくでも引き出し、参らするが宜からうといふ事に、一決した。そこで、唱歌の上手な神、踊りの甘い神といふ工合に、何でも歌舞音曲に達せられた神々が、幾人も岩戸の前へ集はれて、有らん限りの聲を張り上げ、有らん限りの撥音を響かせて、天地も引つくり返る様な亂痴氣騒ぎをやつた。陽氣も陽氣、この上もなき大陽氣笑ふ、踊る、歌ふ、空前絶後とも云ふ可き大騒ぎをやつた。素盞之雄命の餘りの御仕打に、激しく御立腹遊ばされたる大神も、自前にこの様な大陽氣な有様を見せ付けられては、最早御我慢もなり難く、岩戸を細目に開かれて、ソツと御覽になる所を先きの程より待ち構へたる、大力士手力雄命は、スワこそと、満身の力を手先にこめて、天の岩戸を引き開け、押し開き、大神のみ手を握つて無理く、引き出し給ふた。この一切那嫩灼たる光明は、天地に溢れ、並み居る神

神の目も眩めく許りであつた。

吾人は、この神話に就て、非常なる意義を見出すものである。天照大神が陽氣を好まれるといふのは、太陽をその御本身とせらるゝ大神として、勿論當然の事である。太陽とは字義にも顯はるゝ如く、天地の陽氣が、一切集積したる本體である。之が陽氣を好むは當然の事である。そして我が神道に於てはこの太陽の主宰神を以て神々の中心としてある。この點より考ふるも、日本が開闢以來、陽氣の國、又笑の國たる事は最も明白なる事實である。

笑ひの反對の怒るといふ事は、穢れと共に、神代より非常に忌まれたものである。憤怒といふ事は、禍津神の所業と考へて居た。素盞之男神は、實に立派なる神であるが、唯一の缺點は屢々怒られるといふ事であつた。このために素盞之男神がどれ丈立身の邪魔をされたか分らない短

氣は損氣といふが、實際素盞之男神は、短氣のため、にどれ位御損をなされたか分らない。父君伊耶那岐大神にも、疎せられる。姉君天照大神にも見放される。唯この時唯一の味方となり、同情者となつて下すつたのは、黄泉國に居られた母君伊那那美神である。然しこの場合母君は火の汚れで非常に汚れて居られたので、この御同情は却つて父君や姉君の反感を買はれる許りで、何の御利益にもならなかつた。

日本に怒りの神はあるが、泣き神といふものは絶對にない。怒りは雷の様なもの、餘り壯快なものではないが、その根本に於ては、決して陰氣ではない。唯泣くといふ事は、何所から見ても、徹頭徹尾陰氣のものである。陽氣の本家本元たる日本に、泣き神の居られないのは當然の事だ。

日本が陽氣の國なる事は、己にその字面の上に見現れて居る。日本即ち日の本である。火の本である。太陽の本家本元である。地理上の位置か

らして、日本民族は自然陽氣に向ふ様に出來て居る。この陽氣の點に於て、萬國に冠たるは素より宜である。

笑の國たる日本が、自然の順序として滑稽を解するは、是れ素より當然の事である。舊約聖書などが、全篇悲壯の氣に充たさるゝに對して、日本の神話は、莊嚴の中にも、自づから可笑味を湛えて居る。古代の遊戯を調べてみても、如何にも長閑かに笑を催す様なのが甚だ多い。萬葉集や拾遺集などの中にも、滑稽の和歌が多い。殊に俳句には、この種類のもものが澤山ある。川柳でも、徳川末期のものには、卑俗で、忌味があるが、初期のものには、淡泊な自然的な滑稽が多い。この淡泊な自然的な滑稽こそ、日本固有の趣味である。

神道では、飲酒を禁じない。禁じない許でなく、適度の飲酒は寧ろ之を奨励して居る。お酒上らぬ神はないで、どの神様へも御酒は上げる。それ

から肉食も禁じない。肉と云つても牛鳥肉は好ましくないが、日本國民の常食たる魚類は、神前に飲がしては無ならない。お供物になつて居る。又色慾も、正當適度のものなら、決して禁じない。佛教のやうに不犯など、喧ましい規律も立てなければ、基督教でいふ様に、眼中の手淫をも咎める様な神經過敏でもない。要するに神道は、人間の陽氣を尊重し、性慾にも適當の満足を與ふるを以て、最も合理的の事と信じて居る。人間が神でない以上、こふ取扱ふが當然である。神道は即ち人間を人間として取り扱つて居るのだ。神道は實に徹頭徹尾人間の友であり、尤も人間の臭味を帶ぶる宗教である。決して超人間の過重なる要求はしない。神道本來の性質から云ふと、非常に陽氣な活氣の隘るゝ宗教で、國民的のあらゆる要素を鼓吹する宗教である。日本國はこの樂天主義に依つても、今より數層倍の大發展をみなければならぬ。苦であ

るが、中頃にして抹香臭い佛敎が渡來したり又基督教などといふ妥協的宗教が入つて來たので、神道の徹底せるこの樂天主義が、段々其影を薄うし、何時の間にもや、この國粹的大精神も、遂に消え行かんとするものである實に慨嘆の至りである。

今日の青年が些々たる事に悲觀したり、煩悶したり、一日として晴々しい氣分のないのは、要するに彼等が神國に生れ乍ら、神道を知らず、悲調を以て一貫せる近世の歐米文學や、消極主義を以て、一貫せる哲學宗教を金科玉條として、之に依つて終始一身を律せんとすればこそ、こふした間違が起るのである。

我が光輝ある豐葦原水穗國をして、空しく亡國の淵に投せんとならば、之でも宜かるふ。然し苟も皇祖皇宗の遺訓を守つて、精進向上し、世界統一の大理想を實現せんとせば、吾人は是非共、失はれたる神代の樂天

主義を復活して、日の本をして再び笑の國としなければならぬ。

十七、神道の簡潔主義

外來の思想とさへ云へば、何でも彼でも、あがめ奉つて三拜九拜するは、此頃の流行のやうになつた。之は敢て今日初つたものではなく、昔からこふした傾向はあつた。欽明の朝、佛敎の初めて渡來した時など、蘇我稻目の様に、西方諸國の皆尊信する所なれば、我國にても之を祭らせ給ふべしなどと、非論理的な妄言を吐いて、我が國粹を無みせうとした愚者もあるから、今日の青年許りせめるのも、聊か酷であるが、先般佛蘭西のワグナーとかいふ人の簡易生活論が入り込んで來た時など、どうも大變な歡迎の仕様で、何が何でも簡易生活でなければ、夜も日も明けない様な仕末であつた。然しこの簡易生活といふ事、寧ろその根本に溯つ

て簡易主義といふ事は、日本の神代より行はれた事で、立派な國粹である。なる程主義とか學說とか云ふ形ではなかつたが、簡易主義は、神代は素より上古の人民の何れも實行し來つた所である。

我が國粹たる簡易主義を知ろうとすれば、まづ神社の構造を見るがよい。恐らく是れ位簡易に、心地よく建てられたものはあるまい。神前の供物なども、佛敎などに較べると至つて簡易で、其祭事なども頗る簡略なものである。日本の古代には、華美とか贅澤とか云ふ事を、極力排して、あらゆる無駄を省いて簡易の事物を愛した。

その衣類なども、頗る簡單なもので、中世に見る様な衣冠、東帯などは、全然なかつた。古の記録を見るに、冠の出來たのは、推古天皇の朝唐との交通の結果で、それ迄は、一向冠といふものは無かつた。男は髪をみづらに結び、女は下げ髪にして、事ある時は、木の枝草の蔓を以て飾りとし、之

をうすと云つた。女の袖が長くなつたのは、比較的近代の事で、上古は何れも筒袖であつた。衣服は布子一點張り、今日の様に絹物を用ゐる事は、絶對になかつた。食事に至つて、簡單なもので、旅行などの時には、玄米飯を柴の葉で包んだものを用ゐた。

彼等は簡易を貴ぶと共に、又非常に淡泊を愛した。何事にも淡泊の趣味を好んだ。食物などは、殊に淡泊で、脂氣のものは、殆ど絶對に口にせなかつた。歐米人が祖先の時代から、獸類や魚類を嗜用したとは、反對に、食物は稀れに魚を用ゐる以外には、一切野菜類でやり上げた。之は無論氣候の關係もあろうが、主として大和民族の性格が淡泊を愛する所から來たものである。

淡泊とは、換言すれば、事物に執着の少い事である。何事でも直ぐ抛げてしまふ。少しの困難に出會せば、早速斷念してしまふ。之は一面、大和民

族の非常な特色なると共に、一面その大なる缺點であつた悪い事に断念めのよいなら結構であるが善い方にも執着が無いのだから結局何事にも大成しないと云ふ事になる。西洋には殺人犯などに随分残忍な所がある。過般紐育で或上流夫人が嫉妬のため女中を殺したが、その殺し方が頗る殘虐を極めたもので、首も手足もバラ／＼に切り落してしまつて、其上女中の血を太か吸て居つたと云ふ。日本にも女の殺人事件は大分あるが、この様なアクトイやり方をするものは一人もない。又愛情に對しても、日本は淡泊である。之は食物の淡泊から來て居るは無論であるが、日本人は本來餘り執拗い戀愛を好まない。西洋の家庭では主人が一寸勤め先から歸つても、細君は直ぐ駆け付けて行て、チュ／＼と接吻する。子が泣いても箸が轉んでも、何でも彼でも矢鱈に接吻する。愛の表徴もこふ露骨になると聊か閉口せざるを得ぬ。

それから洋服と和服と、洋傘と和傘と、靴と下駄と、こんなものを一々比較すると、彼地のものに比して、日本の物品がどれ位簡易で、淡泊なかい分る。日本人は淡泊を愛すると共に、又清潔を好むのである。我が國人ほど清潔を愛する國民は、世界國中何處へ行つても恐らくあるまいと思ふ。我が國人の清潔好きといふは、神代からの習慣で、古事記を讀むものは、神代の神々が不潔を罪惡視するの度が如何許り強きかを見て、一驚を吃するであらう。神々は不潔を以て禍津神の仕業だと云つて、恐れ且つ避けた。若し神々の規約を無視して不潔な所業に及ぶものあらば、直ちに峻烈なる罪科に處して、神々の仲間はずれとしたのである。神代に清潔を貴んだ事は、今日神社によく現はれて居る。神社の所在地は、大概俗塵を絶てる清淨の地で、社前に至れば、白砂、雪を敷き、歩廊には一塵をも止めずといふ清々しさである。又禮拜には必ず手洗で手を

濯ぐ事になつて居る。

又神式には大祓と云つて清めの式もあれば齋戒沐浴など云つて今日の冷水浴で飽く迄も四肢五體の汚垢を清める事になつて居る。今日山伏などが瀧に打れるやうに、神道に於ける禮拜の根本には、清淨といふ事がその基礎となつて居る。

以上神道に於ける簡易と淡泊と清潔と、是等を一括して神道の簡潔主義といふ。この主義は道徳上又は衛生上より見て誠に結構な事で、殊に衛生上には頗る有益で、日本人が肉食以前には、今日みる様な結核や癌腫などいふ悪性な病氣は殆ど無いと云つてよい位であつた。

吾人はあらゆる點に於て神道の簡潔主義に復歸すべしであるが、その結果、今日の様に小成に安じて、萬事に徹底しない様な事は無くしたいものだ。

十八、神道の膨脹主義

政は即ち祭事なりで、日本には一時祭政一致の時代があつた。宗教と政治と餘程縁遠いようであるが、日本の宗教は、此點に於て、非常な特色があつて、神道の標榜し、鼓吹する所の主義は、餘程政治的であるのだ。

神様を政治家だと云ふと可笑しいが、近來日本の政治家には神様が、大分出來たから、神様の政治家も、滿更無い譯ではない。日本の神様が何故政治家風であり、日本の神道が何故政治的色彩を帯ぶるかといふに、之は古事記を讀めば直ぐ分る事で、少くとも伊邪那岐伊邪耶美兩神以降の神々は、何れも國土の經營を以て念とし、給ひ、何の神も相當政治家的手腕を揮はれて居る。日本の神々は、佛敎の佛達の様に、主として生死の事にのみ没頭しては居られない、寧ろ活潑々地に直ちに政治の上に、

その手腕と力量を用ゐられて居る。この點は實に日本神道の一大特色で、世界の宗教界に卓立するに足るのである。

神々の政治的御行動を拜察するに、何れもその根本に於て、國土の膨脹を念とされざるはない。即ち神々の御政治は、膨脹主義を以て一貫して居られる。唯々國土の膨脹のみでなく、人々の増加も大に計つて居られる。天の益人と云つて、人の益すのを、何よりの吉事とされて居る。

伊邪那岐、伊邪那美兩神は、國土膨脹の第一着手として、先づをのころ島を生きた。それから次ぎ／＼に大八洲を産まれた。日本開發の第一着は、伊邪那岐神の天の淳矛によりて行はれたのである。伊邪那岐神に次いで、大國主命はこの國土を更に御開發になられる。素盞之男神は母君と共に夜見の國即ち朝鮮を御遠征になる。某々の神達は、大神の命を奉じて、天の壁立つきわみ遙々と八百重の波をおし分けて、外つ國迄も

國見に行かれる。嗚呼、何といふ御雄圖であるか、舟楫の便なき三四千載の前、朝鮮、南洋迄も、御發展になつたといふ事は、何といふ雄大な御計畫であろう。今日になつて、移民政策とか帝國主義とか云ふは、實に迂濶千萬な話で、日本では數千載の昔、神々の代より、已に帝國主義もあり、又殖民政策もあつたのである。

日本古道の精神は、生めよ、殖えよの主義である。天の益人主義である。國土は愈よ擴大し、人口は益す増加し、遂に世界統一の大目的を達するのが、大和民族の天より授けし一大使命である。釋迦はその法華經に於て、日東帝國が何時の世にか、必ず世界を統一す可き事を豫言して居る。日蓮も之を極端に主張した。異教たる佛教側からでも、世界統一を唱ふるほどあるから、日本生え抜きの神道側にて、何条之に劣る事あるべき。歴代の神道家は、一人として此事を口にせざりしは無いが、就中平田

篤胤翁に至りては、大聲疾呼して、筆に口に極力之を稱道したのである。之を事實の上にも、上代に於ては、日本武命の東西兩夷御征討の事あり、降つて神功皇后の三韓征伐、降つて秀吉の朝鮮征伐あり、明治年間、於ては、日清、日露兩戰役に依つて、最もよく我國粹なる膨脹主義を發揮したのである。

その他山田長政のシヤムに偉功を樹てたる、又倭寇の支那海岸を荒したる事は、匹夫の勇に似たりと雖、その精神に於ては、我が神代以來の國是を實行したるものと云ふべきである。

我國は陽氣の國なると共に、又膨脹主義の國である。一日、一時と雖、退嬰を許さない。向上又向上、吾人の國土が政治的に大發展をなすと同時に、個人的には、その富も、その精神も大發展、大精進をなして、世界の膨脹國民たるに恥ぢざる事を心がけねばならぬ。

吾人は徒らに佛教基督教を攻撃するものではないが、從來是等兩教のために、我が國の膨脹が幾度びとなく、阻害されたる苦き經驗を嘗めたる以上、是等兩教に對しては、將來大に警戒を加ふるの必要がある。

十九、古神道と俗神道

神道の流派は、普通十三派に分れるが、之を大別すると、古神道と俗神道の二種となるのだ。古神道といふのは、所謂神ながらの道で、日本固有の神道で、荷田東麻呂を初め、本居宣長、平田篤胤等の極力稱道したる神道である。俗神道と云ふのは、所謂神佛習合の説で、一名垂加流とも云ふて、吉田垂加初め、俗受け一方の神官と、佛教の教理を無理無體に、我が國體に當て、箝めんとした俗臭紛々たる佛教家との習合から生れたもので、本地垂迹とか、何とか云つて、笑ふ可き捏造説を流布して居る。

元來唯一の教である可き善の神道が何故古俗の二派に分れたかといふに之には深い仔細がある。その初め佛教が欽明天皇の朝に渡來して以來次第に上下に勢力を得るに従ひ僧侶のうちにはどうかして佛教を神道に結び付けて佛教を日本の國體に合せしめ大和島根に佛教の深き根據を置かんとした。この一念が動機となつて本地垂跡の説となり、兩部神道なるものが現はれる事になつたのである。

本地垂跡の説が最も明らかに現はれたのは、聖武天皇の時行基に命じて、東大寺を造營し給ひ有名なる所謂奈良の大佛を鑄造し給ふた時に、この事實が現はれたのである。大僧正行基は大佛に勿體を付けんがため、こんな説を稱へた。奈良の大佛は、天照大神の本地である。天照大神は即ち天竺の菩薩の垂跡である。故に皇國にあつて天照大神を拜するものは寧ろその本源に溯つて、大佛の本尊たる菩薩を拜するが當然

だと云つた。元來この本地といふは、通俗にいふと、本家本元といふ位の意味で、天照大神を初め日本の神々は云はゞ出店の御主人で、本家本元の主人は印度の諸佛であると云つた。この説を確めるためには、いろいろ佛典の文句など引き出して來て、日本建國の以前經文にチャントその意味が書いてあるなど、怪しからぬ事を云つた。之は素より彼等が勝手に經文の文句を曲解して愚民をまどはしたに過ぎなかつた。

殊に滑稽なのは、本地垂跡の説を更に擴充して、釋迦如來は兜率天に居たる善賢菩薩の垂跡だと云ひ、又道教の元祖老子は天竺に於ける菩薩の垂跡儒者の本尊たる孔子や顔回もそれ〴〵天竺に本地があると云つて、經文を引き合ひに出した。その經文にはこんな文句がある。閻浮提中有振邊國。我遣三聖在中化導人民。儒童菩薩彼稱老子。伽葉菩薩彼稱孔子。月光菩薩彼稱顏回。之は素より彼等が經文を改竄したもので、國民

を愚にするも亦極れりだ。
 若しこんな文句が實際古來の經典中にあつたとすれば、佛教といふものは誠に出鱈目な宗教と云はねばならぬ。何となれば、年代の上から云つても、老子は餘程昔の人で、この經文を作つた釋迦よりも大分前の人、孔子は釋迦と同時代で、七年後に死んだ人だ。こんな分り切つた大虚を云つて、それで國民が信すると思ふは、誠に面目度い次第である。行基からこふいふ事を申し出たに依つて、聖武天皇の十三年、天皇は、その實否を確むるため、橘諸兄をして伊勢の太廟へ伺ひに出した。この時神託に「實相真如之日輪、照却生死之長夜、本有常住之月輪、燦破煩惱之迷雲」とあつて、神佛習合を許し給ふ様なものであつた。之は要するに諸兄等の猥りに作り拵へたもので、伊勢の大神が何とてかゝる汚はしき事を仰せ給ふ可き實に怪しからぬ次第である。この神託を聞いた行基

は飛び立つ程に喜んで歸る所を、菩提と云つて、その頃唐より來れる異人が出迎かへて、手を取り合ふて共に菅原寺に入り、物など食ふた後、板を叩き、舞をまふた。その頃まで菅原寺の側に居たる、三年起きず、物云はす、唯時々頭をあげて東方を見て居りし一異人、俄かに寺に入りて、時哉々々縁熟哉々々と幾回となく唱えて、喜び勇んだといふ事が、この頃の古書の中に見えて居る。平田翁などの説に依ると、この異人は唐より入り來りし有名なる幻術家で、元來本地垂迹などいふ怪しからぬ説の行はるるに至つたのも、畢竟是等異人の幻術の爲す所だと云つて居られる。

その當座、奈良の大佛お氣苦勞「神國の庇を借りて大伽藍など、川柳點にもある通り、この當時の兩部神道の説ほど曖昧な虫のいゝ怪しからぬ、人を馬鹿にし切つた説はないのである。

天地麗氣記十八卷には、兩部神道とは、金胎兩藏の旨を、神道の事實に習合して造り立て、神は佛の垂跡、佛は神の本地といふなどあり、又神佛兩教の勝を取り、劣を捨つるともあるが、之は要するに神と佛の習合ひで何の縁故もない神佛を無理に一體のものにせんとした實に怪しからぬ説である。殊に佛を以て神の本地即ち本家本元といふのは、何といふ理不盡な説だらう。こんな邪説でも支那の僧侶が稱えたとすれば、又多少怒す可き點もあるが、同じく皇國の民と生れ、神國の粟を食みて、限りない神恩に浴せる者にして、この様な非理非道な邪説を稱ふるに至つては、一種の賈國奴と云ふより外はないのである。

俗神道の勢を得て後の神道界は實に云ふに忍びざる有様であつた。神社に遠慮なく佛名を冠して南無八幡大菩薩など云つて少しも怪むの風が無かつた。遂には僧侶と神官とかはりなく、仕ふるといふ變挺な

神社も出來た、何といふ情ない事であろう。然し何時迄かゝる妄説背理の所業が許さる可き、本居平田の諸先生が相次いで古道を稱道したる結果、今日に於ては、古神道を以て、國教とお定めになる事となり、兩部神道の如き異端邪説は地を拂つて空しくなつたのは、國運發展の上より云ふも、國粹保存の上より云ふも、誠に祝す可き次第である。

二〇、神道と教育勅語

歴代の聖君が、何れも御敬神の念に富ませらるゝ事は、その御言動に徴しても、明らかな事實であるが、殊に明治天皇が御敬神の念篤かりしは、その勅語を拜誦しても、首肯かるゝのである。明治天皇の勅語には、何れにも神道の大精神の現はれざるは無いが、就中その最も顯著なるは、實に教育勅語である。

申す迄もない事であるが、この教育勅語は我が國民教育の根本方針を定めた大切なもので、この勅語程日本人の頭腦に深く染み込んだものはない日本人で教育勅語を知らぬものは恐らく一人もあるまい。この勅語の煥發されたるは、明治二十三年であるから今日四十歳以下の者は、何れも小學時代には、この勅語を聞いて居る筈だ。

今この勅語を拜誦するに、この勅語が古今の名文たるは素より徹頭徹尾國粹的大精神の宣傳たるの點に於て、一大特色を有するものである。勅語の第一句は「朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つる事深厚なり」と仰せられて居る。之は皇室の御遠祖たる天照大神や伊邪那岐伊邪那美の兩神其他の諸神が國土御經營の事を申されたもので、建國の大精神はこの一句の中に含まれて居る。次の句は我が日本國體の精華を説明されたもので我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を

を一にして、世々厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存すと云はれて居る。全く此御言葉の通りに、我が國體の精華として中外に誇る可きは、古來我が國民が忠孝の念に富むの一事である。之は上代神々の御行跡を見ても分るが、我國は上つ代より忠臣孝子の輩出せし國で、この一事は實に萬國に冠絶せる一大美點と云ふ可しである。

この勅語に於て尤も注目す可きは、終末の一句である。即ち斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、云々とある。この一句には、表面の字義以外千萬無量の深意を寓せられたものと拜察する。

之を平易に砕いて申せば、以上掲げたる所は、天皇の御遠祖たる神々の遺しおかれたる御教訓で、天皇も國民も共々に従ひ守る可き大道で

ある。この大道は、時の何たるを問はず、何時の時代にも通用の出来るもので、又この大道は、唯に日本國の必用なるのみならず、外國に施しても、決して不都合のない教である」と申されて居る。

嗚呼、何たる廣大な思召であらう、何たる壯烈な御宣言であらう、之を中外に施して、悖らず、この神道こそ萬國共通の大道ぞ、世界の大道は、我が國粹たる神道を外にしては、到底得られないぞと仰せられた御言葉の中に、世界統一の御雄圖が、隱微の間に含まれて居る。

世界何れの國にも、勅諭はある。然し我が教育勅語、程雄大にして、且高遠なる大理想を含んだ勅語があるか、斯の如き大理想を宣言し給ふたのは、畢竟明治天皇の雄偉英靈なる御人格の反映と申す可きは、勿論であるが、我國若し神道の如き大道を有せなかつたなら、到底かゝる大理想を宣言さるゝ事は出来なかつたであらう。

この勅語は、單に我が教育界の指南車たるのみならず、亦我が國是を定む可き一大宣言である。我等日本國民たるものは、この勅語を拳々服膺して、國威を中外に輝かすは、獨り陛下忠良の臣民たるのみならず、亦我國の建國者たる皇祖諸神の御遺訓にも従ふ所以である。我國の盛衰は一に懸つて、この勅語にある。教育勅語の御趣旨を謹んで遵奉すれば、我國は大に興るべく、之に背く時は、我が國は衰ふるのである。吾人はこの勅語に對し奉りて、古事記に對すると同様の尊敬を捧げたいと思ふ。

二十一、神道の養生法

今日は養生法の世の中である、種々の方面から種々の人間が飛び出して、切りに新養生法を稱える。曰く冷水浴、曰く二木式腹式呼吸、曰く岡

田式静坐法曰く藤田式調息術曰く精神統一法曰く何曰く何と五月蠅いほど後から後へ稱道せられる。

一寸見ると是等は何れも發案者の新案の様に思へるが其實是等は十中の八九分迄先人に依つて云ひだされ書きだされた事で之を知らずに二十世紀の新發明の様に考へてる者こそ氣の毒千萬な次第である。

今日の養生法には禪から來たものもあれば又武術者の氣合術などから來たものもある就中其數の最も多く又その系統の明らかなものには即ち神道から出た養生法である。二木博士の腹式呼吸なども博士自身の告白を見ても分る様に之は明らかに平田翁の説から來て居る。腹式呼吸に就いては平田翁の説明を聞かなくとも古來神官は之を實行して居る。朝には日の出を拜んで清い空氣を胸一杯に呼ひ込んだり、そ

れでなくとも祝詞を上げる時腹の底から聲を限りに讀み立てるのであるから自然深呼吸をする事になる。

冷水浴なども此頃初つた様に思つて居るが之は古から神道の儀式として行はれて居たものである。即ちみそぎとして古くから行はれて居る。みそぎとは水灌ぎの事で之に依つて年内の罪汚れを一洗するためである。之は何も養生法としてやつた譯ではない。唯事の外不淨を忌まれる神に仕ふる儀式として行ふたのであるが之は自然養生法にも叶つて皮膚の鍛練上今日の冷水浴と寸分の相違もない効果を上げるのである。否冷水浴以上の効能があるのである。冷水浴は單に機械的に頭から水を注ぐのであるが神道家のやる潔齋沐浴といふ様なものは單に身體ばかりでなく精神からも一切の不淨を除くといふ信念を固めてやる。信仰の下に精神を統一してやるのであるから單に物質的に

やるのと違つて其効果の偉大なのも勿論である。今日でも大病人のある時神明へお願を込めて七日とか三七日とかの間一心不乱に水垢離を取る。全身の血も凍るかと思はれる。大寒の最中しかも真夜中丑三つ時に、淋しい井戸端で、晝の様な美人が頭からザブ／＼浴びて居るのを見たと、物凄くも又莊嚴な感に打たれる、かく迄も一心を籠めて祈る事であるから神も照覽ましく、病人も全快するし、その後は、水垢離を取つた當人も非常に壯健になつたといふ例はいくらもある。

今日精神統一法とか調息術とか、いろいろあるが、之も古くから神道の方で實行されて來たもので、何も今更珍らしがる程の事でもない。神官の祈禱は禪僧の禪定と何の異なる所はない。神官も未熟なうちは、そふでもないが、年功を積んで呼吸を呑み込んで來ると、祈禱の中に、一心を投じてしまつて、祈禱以外に自己も無く、天地も無い、この境に入ると、

ふ無我無心になつて、靈魂は自己の醜骸を離れて、神の靈と同化する。祈禱などの非常な効驗のあるのも、畢竟神官が、そふした境地に入つて、神の靈と一致するからである。或老神官の云ふ所に依ると、真に一心を籠めて祈禱して居ると、自然に全身が顫動して、手にせる幣が、切りに左右前後にふれ動くさうである、この境を通つて全く無我に入つた時、忽焉として、神の靈魂は幣の上に移つて、殆ど堪へ難い程重くなる。それが荒魂ほど重く感じるさうである。殊に歴史上有名な英傑などの魂になる。と、その感じの荒い事非常なもので、中には家鳴り震動して幣に移るものがあるさうである。

大分枝葉に入つたが要するに、神官は職掌柄自然に冷水浴もやれば、深呼吸もやり、調息術も行ふと云ふ風に、種々の養生法で身體を鍛練するから、神宮の中には非常な長壽者が出る、神道家のうちには病人が少

い。肺結核の統計に依るも、神官には少く、徴兵の合格者は、神官に多い。も
と、是れ神の道は、自然の法則である。神道に従ふ事は、自然の法則に従ふ
事であるから、之が好個絶妙の養生法たる事は、云ふ迄もあるまい。

二十二、神々の靈驗

何事のおはしますか、は知らねども、有り難さにぞ、涙こぼるる。吾人が
神前へ立つた時の感想は、實にこの一首の中に言ひ盡されて居る。何故
と説明は出来なけれど、一種莊嚴の氣に打たれて、思はず神の御前に
額づくのである。
又或人の説に依ると、夜中墓場で寝るよりも、神殿で寝る方が遙かに
恐ろしいと云ふ。之は實際だらうと思ふ、かくも物凄い程の崇嚴な氣を
有する神々の事であるから、其靈驗も又格別である。

神々の靈驗に付ては、古來數へ盡せない程の實例がある。殊に國家の
太廟たる伊勢神宮が、一國に事ある毎に、非常なる靈驗を顯さるゝ事は
古來我が國民の親しく見聞した事實である。北條時宗執政の時、元寇の
事あるに際し、龜山天皇は親しく伊勢神宮に祈られ、身を以て國難に代
られんとせし結果、遂に筑紫に於ける神風となりて、現はれ、十萬の敵軍
を一掃し盡したるは、實に有名なる史實である。其後も、度々御祈願の事
あつたが、近く明治年間に至り、日清日露の二大戦に於て、明治天皇の親
しく伊勢太廟に鳳駕を曲げられ、御熱誠を籠められたる御祈願のあつ
た結果、遂に二大戦捷となつて、空前の大勝利を得たのは、讀者の記憶に
新たなる事實だらうと思ふ。
是等は靈驗の國家的に現はれた實例であるが、個人的にも種々の有
難い靈驗の實例が、澤山ある。覽者が立ち、盲者が明き、聾啞が口を利いた

といふ様な事は、實に枚擧の出来ない程ある。聖書などには、こんな事を世界の奇跡だとして、さも自慢さうに擧げてあるが、神道にはこんな奇跡は、ざらにある事で、基督教流に一書き立てたなら、幾ら書いても書き足るまい。否書く迄もない。こふした奇跡は、吾人が今日尙日々實見する事であつて、科學の進歩とか、物質的の世の中だなどいふものゝ、今日でも一念を籠めて祈れば、必ずや神の感應はあるものである。

明治年間に出版した「近世神異紀聞」といふ本を見ると、之には一切明治年間にあつた神々の靈驗を集録して、數百に達して居るが、中には實に駭く可きものがある。一例を擧げると、明治十五年頃、神奈川縣に某といふ破落漢が居つて、いろ／＼不敬な所業をする。彼は豪語して曰ふ、世に神などゝ云ふものゝあろう筈はないなどと、途分もない暴言を吐いて、誰彼の止めるのも聞かず、神社の御くじを千切つて捨てたり、神札を

焼いたり不敬の限りを盡したが、これ丈では何の事もなかつたので、益す増長して、遂に村社の社殿に入り、白晝公々然として靈代を取り出し、之に唾を吐きかけた上、自宅の雪隠へ投げ捨てた。この事は縣下の大事件となり、彼は遂に入牢となつたが、入牢の後、毎度世にも恐ろしい悪夢に襲はれ、遂に精神に異状を來したる後、囈言の様に、切りに前非を後悔して、狂亂の姿となつたが、神罰は恐ろしいもので、彼は狂ひ死に死んだのであつた。

又石川縣下に神杉を切り倒したる爲、一村丸焼けになつて、殊に人夫を指揮して切らした者の家は、蒲團や衣類迄焼き盡し、そのみならず、一家残らず、焼け死んだといふ。こふ云ふ例を一々拾ひ集めて來れば、まだ幾らあるか分らない。

之を要するに、神々の靈驗は、今も昔も著明である。一念を凝らして、祈

願を籠むるものは必ずや之に應ずる丈の御利益があるに相違なく、又故もなく之を瀆す者の上には、屹度神罰のあるに定つて居る昔も今も神の神たるに於て、何の相違も無いのに、世が進歩したから神は無いの神の御利益は無くなつたのと云ふ様な事は、論理の上より云つても、少しも請け取れない話である。唯世が進むにつれて、人情は輕薄となり、信仰の念も薄らぐに依つて、神々の靈驗も自然著はれない次第である。今の世でも若し一身を投げ出し、一心を打ち込んで祈願を籠むれば、事として遂げざるはなく、物として成らざるはなく、諸願は忽ち成就するであらう。ゆめ〜疑ふ事勿れ。

二十三、歐米人の神道観

歐米人にして日本の事情を誌せるもの、中には、随分うがつた事も

あれば、又随分奇抜な事もある。然し大體に於てどうも見當違ひの見方をして居る。殊に神道を論じたもの、中には、随分淺薄な不徹底な見方がある。こんな間に間違つたものを紹介されては、大變迷惑であるが、風俗人情を異にせる外國人の筆に上れば、この位の皮相しか寫せないのは、或は當然の事かも知れない。

神道を傳へた歐米人の著書は、澤山はない。吾等の眼を通したのはい、冊位のものであるが、今その代表的意見とも見る可きものを左に紹介せう。

歐米人の神道観に曰く

日本に神道なるもの、出來た年代は、確かな事は分らない。大體の年代を云ふと、多分紀元前六百六十年頃だらうと思ふ。大和民族は、儒教も消化し、基督教も消化したけれど、自發的のものは、神道唯一つあるのみ。

だ而かもこの神道も果して自發的のものなるか又朝鮮支那より傳來せるものなるかは判明しない唯この宗教が孔子以前のものなる事だけは明かである。

神といふ字は無論支那から來たものであるがカミといふ日本語本來の意味より云ふと之は何でも能力なり品質なりの極めて勝れたるものに付したる名稱である偉大なる力か秀拔なる性格を有するものは鳥でも獸でも海でも山でも樹でも草でも一切は神と云つて差しつかえないのである元來神といふ名稱はもの、善惡に依つて付けられたものではなから神のうちには善い神もあれば又悪い神もある帝王即ちトツカミの様に貴い善い神もあるかと思ふと鳴る神と云つて電の様な恐ろしいものもあれば又をいかみと云つて狼の様な獍猛な奴もある其他天狗や狐の様に神秘なものとか奸智に長けたものは一

切神とせられる現に狐などは正一位稻荷として到る所に祭られてあるそれから山の様に高くて登り難いもの、又海の様に深くて渡り難いものは何れも神として祭られる。

之を要するに日本の神といふものは天地萬有何ものにも水平線以上に秀でたるものに付したる名稱である羅馬人希臘人の如く日本人も亦天地間に超越せる或物を認めて居るこの超越せるものに教へられて野蠻より智的に進むのであるそして快樂に生き希望を持つて死するのである。

茲に注意す可きは神道と帝王との關係である本居翁に従へば神道とは帝王に従ふの道だとなるかくして帝王は治め人民は従ふといふ風に昔から定められて居る。

以上は代表的歐米人の觀たる神道観である大體に於て左程の間違

はなく、外國人として比較的よく觀察して居るが、外國人の情けなさに
 は、所々勘違えをして居る。間違を一々指摘すれば、際限のない事である
 が、その根本の間違を云ふと、彼等が日本の皇室と臣民の間を以て全く
 機械的に解し去ろうとした誤りである。國情を全然異にせる彼等とし
 ては、寧ろ當然の事であるが、兩者の關係を以て、天皇は治め、臣民は従ふ
 といふ様に、統治と服従以外何の情味もない様に解したのは、之は却つ
 て神道を無視し、上下三千載の我が歴史を無視したもので、外國は知ら
 ず、我國に於ては君臣の關係はそんなに冷たい機械的なものではない。
 日本に於ける君臣の關係は、家庭に於ける戸主と家族との關係の如
 く、その間には、温い、切つても切れない血の關係があるのである。之は我
 が歴史を通讀した上、更に神代の事より考へてみると、最も明白な事柄
 で、日本國民は誰れ一人疑ふものは無いのである。歐米各國の様に、君臣

の間が、單に權力の關係で成立して居るならば、權力の消長に依つて、其
 關係にも異動が生ぜなければならぬが、我國の君臣關係は、權力を外
 にしても、更に情誼の關係、血の關係に依つて結合されて居るから、天下
 にどんな動搖があろうとも、君臣の間は金輪際變り様はないのである。
 是れ實に我國が萬世一系の天皇を戴き奉り、未だ嘗て一度びも歴史上
 に些の汚點を印せざる所以である。神のみ國に生れたる吾人は、此一事
 を、呉々も肝に銘じて忘れぬ様にしなければならぬ。

二十四、神道に現はれたる櫻花の

如き大和心

敷島の大和心を人間はば、朝日に匂ふ大櫻花といふは、人も知る本居
 宜長翁の名吟で、三十一文字の中に、よく優雅なる大和心を言ひ盡して

居るこの歌にも現はれて居る様に、日本人の性格は決して薔薇や牡丹の如く灼爛目を奪ふ様なものではない。又蓮や水仙の様に、抹香臭い人間離れのしたものでない。大和心は實に今を盛りと咲き匂ふ山櫻の様なものである。

概して基督教國の人は、濃艶紅薔薇の様で、やる事は如何にも華かであるが、往々極端に走つて躓く事が多いし、佛教國の人は蓮の様に見た所は脱俗の風があるが、活動が鈍いから、その國は段々周圍から蠶食されて、今では何れも亡國の淵に沈淪して居る。唯獨り我が神道國の民は紅に非ず、白に非ず、其の中間の淡紅色即ち櫻色で、歐米人の様に、人道を無視して迄も活動はせず、又印度人などの様に閑氣に構へ込んでも居ない。その心事は如何にも高潔で、一面非常に立派な徳操を有して居るが、それかと云ふて、常に聖人氣取りで、人に右から頬を擲られても平氣

の平左で、左の頬をさし出すといふ様な鈍馬な事はしない。我が道に當つて苟も非理非道なものを見れば、全力を揮つて之に膺懲を加える。花の如く、又鏡の如く優美圓滿な一方には、劍の様な鋭い元氣も意氣もあつて、事に當つては一命を賭して迄も奮進する。要するに仁と勇とを貫くに正義の念を以てせるものが大和魂であつて、古來我が國の英雄には、何れもそふした傾向があつた。この大和魂こそ神道的大精神で、世界萬國に比類のない國粹である。

神代の神々は、初めて咲き出でし山櫻花の様に、如何にも鮮明にこの特色を發揮されたのである。伊邪那岐、伊邪那美兩神の如きは、最もよくこの大和心を現されて居る。兩神初めておのころ島へ降りられて、有名な國柱巡りをされた時、陰神の方が先づ唱えて曰はるゝには、あな善い哉、美少男焉と云はれた。然し陰神が先唱されては不可とあつて、更に國

柱を巡つて、今度は陽神より聲をかけられ「あな善哉美少女焉」と云はれ
 それから夫婦の固めをされたといふ無心に讀めば何でも無い事の様
 であるが、吾人はこの陰陽兩神の如何にも天真爛漫な御戀愛を見て、こ
 の一句の中に、大和心が躍つて居る様に感ずるのである。今の世の中は
 道徳で候ふの倫理で候ふのと、豪い七面倒な事となつて偽を云はなけ
 れば、一刻も生きて居れないといふ恐ろしい世となつたが、神代には絶
 えてこふいふ邪魔物はなく美を美と云ひ愛するを愛すると云つて、少
 しも隠す所がなかつた。如何にも率直で、淡泊であつた。この率直と云ひ、
 淡泊といふ中に、眞の大和心があると云ふ。
 須佐之男命は、非常な荒神で、御母君の居られる根の堅洲國へ行かる
 時、山川悉く動み、國土皆震ふと云ふ程、萬づ雄々しい神様であるが、肥
 の川上では、足名槌の姫の危急を救ふて、八頭の大蛇を退治された。この

大蛇退治に於て、須佐之男神の俠を見る事が出来る。若し萬一須佐之男
 神にして、その亂暴が弱きを挫き、強きを恐れる様のものであれば、如何
 に勇力を有たれて居ても、その勇力は少しも誇るに足らぬ。又そんな神
 様は、決して日本の神様でもない。日本の神には、その御性格の根本に於
 て、必ず俠的な所がおはすのである。この御精神が即ち大和心で、大和魂
 には、必ず義侠心があるのである。

天照大神は、神々の中心に立たれたる程の大神で、その御品性は、あら
 ゆる善美にして高貴なる分子を集められて居つた中でも、吾人の最も
 感佩に堪えぬのは、その如何にも御寛大に渡らせられた事である。須佐
 之男神の如きは、随分惡戯なお弟で、姉君として殆ど愛憎も盡きられた
 事と思ふが、如何許り御立腹になつて居られても、須佐之男神にして、御
 悔悟になり、行を改めらるれば、忽ち前非を御恕しになつて、姉弟の情誼

は、少しも平常に變らぬといふ如何にも洒々落落々として寛大におはした事は驚かるゝ程である。この洒々落落々たる寛大なる襟度は實に大和心の精粹であつて、昨日迄も敵味方と分れて鎬を削つて居ても一朝和睦すれば忽ち舊怨を捨て、握手する。この襟度こそ大和武士の特色で古來の戦紀を見ると、そふ云ふ實例には、澤山出會すのである。現に日清、日露兩戰役に於ても、我軍が捕虜を善遇し、負傷の敵兵を手を盡していたはつた所にも、この特色は現はれて居る。

日本武尊も最も大和心に富まれた方であつた。尊は身の長一丈力よく鼎を扛ぐるといふ程の御英傑にましゝたが、御性の猛々しきに似もやらず、御容姿花の如く、少年の時は少女とも紛ふ許りのお姿であつた。尊如何に御勇力にましますも、西國に名たゝる大豪熊襲を一劍の下に討ち取られやうとも思はず。之は畢竟その玉の如き御容姿が熊襲を、

十二分に麻痺せしめて居たに相違ない。

尊の御容姿と御勇力と、そして御優雅なる御心根は、到る所に戀草の根を張つた東征の砌り、弟橘比賣命が尊の御身代りとならせられて、蒼海の藻屑となられたのは、有名であるが、其後尊は到る所に若き戀人を得られて、彼等と贈答し給へる歌には尊のみやび心を遺憾なく詠まれたものが頗る多い。今日の倫理から云ふといろ／＼議論もあろうが、そふ云ふ拘束のない世に生れられた尊が、一方御武勳の熾々たる傍、美しき戀の奴となつて、切々たる思を運ばるゝに至つては、最も興味ある事で、これやがて大和心の發現と云ふべしである。

雄略天皇は、武烈天皇と共に最も御勇壯の君にましました。が、この君にも面白い逸話がある。雄略天皇が或時伊服岐山へ例の狩ぐらに行かれた時、忽ち牛の如き白猪現はれて、天皇に向ふて來た。この時從者

は逸足早く逃げ失せたが、天皇は足を擧げて蹴給ふと見る間に、さしも
 荒れ狂ひたる大猪は忽ち血を吐いて倒れたのである。御勇力駭くべし
 でないか。天皇は之より山を下りて、志幾の大縣主の邸へ向はる、途中、
 初瀬川を御渡りになる時、遙か下の方を見給ふと、その時一人の少女を
 見られた顔は紅玉の様に照輝ける美しい少女である。天皇は一見恍惚
 として、直ちにその少女を召され、汝望みとあらば、何日にても宮殿に來
 よと仰せられて、御墨付を與へられた。其後女の方に種々事情があつて
 八十年の年月を空しく處女の身で過し、九十幾歳の高齡になつて初め
 て宮中へ出仕して、天顔を拜した。その時この姫は恐るゝ先の日の事
 を申し上げたが、何様八十年を経過した事であるし、女の姿も太く變つ
 て居るので、天皇は容易に信じ給はなかつたが、御自筆の御墨付を見ら
 るゝに及んで、成程若かりし時、さる事もありしかと、大に興を催され、破

顔一笑如何ちや、宮中に留らぬか」と仰せられた之を聞いた老女は身も
 世もあられぬ程に恥ぢ入つて、若き時は兎も角、かく老年に及びて御宮
 仕へも勤らず、唯今日罷り出でたるは唯出仕の遅れたる御説を申し上
 げんために候ふとてさめゝと泣き入つたので、天皇は世にも氣の毒
 の老女よと思召され、その前の事を詠せられたる一篇の長歌と共に幾
 十枚の黄金を與へられたさうである。

之は頗る面白い御逸話だと思ふ。牛の如き大猪を譯もなく打ち殺さ
 れたる天皇にして、老女の身の上同情されて、御手づから御自筆の長
 歌を御渡しになるといふは、何といふ床しい御風懷であらう。

この大和心を最もよく現はしたのは、云ふ迄もなく古來の忠臣義士
 である湊河畔の楠正成御跡したひて割腹したる乃木大將夫妻、日露戰
 争の花と謳はれたる廣瀬中佐是等武將の性格は實に大和心の精粹を

集めたもので、彼等の性格中には、世界各国の如何なる國民にも、その類例を見ざる美はしくも高貴なる或物があつた。高貴なる或物とは、果して何ぞ、勇か、仁か、俠か、義か、勇といふも云ひ足らず、仁といふも云ひ足らず、俠と云ふも云ひ足らず、義といふも云ひ足らず、是等の總てを集めて一丸となしたる櫻花の如き大和魂である。

二十五、神道と佛教の關係

神道と佛教とは、枝葉に於てこそ異りもすれ、其精神に至つては、多く異なる所無かりしを以て、佛教傳來後に於ても、さして兩教の間に葛藤はなかつたが、欽明天皇の朝、佛教の傳來するや、元來この宗教は第一日本の國情に反して居たし、又日本固有の神道とは、氷炭相容れぬ様な教理を有して居たので、渡來の當初より、絶えず衝突が續いたのである。

最初欽明天皇の朝、初めて佛教の傳來するや、朝廷に於て早くも、迎佛黨と排佛黨とが現はれたのである。當時廟堂にあつて、聲威を揮ひし大臣蘇我氏は、厩戸皇子と共に迎佛黨の首領となり、大に佛教の有難きを説いたが、之に對して、物部氏は激しく排佛の説を鼓吹し、茲に端なくも一場の争端を醸したが、その結果、佛教黨なる蘇我氏は、厩戸皇子の援助を得て、遂に排佛黨なる物部氏を滅ぼし、その土地部民を併領し、これより愈よ蘇我氏全盛の世となつた。蘇我氏が切りに佛教説を鼓吹したのは、果して其教理が分つて居て、其教理に賛意を表してやつたといふよりも、寧ろ佛教を政略上に用ゐて、自己の權勢を張らんとしたと云ふが穩當である。益す怪しからぬ話である。

上古祭政一教の世には、敬神祭祀の外には、教法といふものは無かつた。天照大神は親ら新嘗祭を行ひ、給ひ神武天皇御即位の後、鳥見山に皇

祖天神を祭り給ひしを始めとして、列朝大に力を神祇に竭し給ふた諸氏の人民も之に倣ひ各先祖を尊びて氏神を祭り心を清く正しくして穢るゝ事なきを務めた之を惟神の道といふ。その後儒教の傳來があつたけれど、其仁義忠孝の説は固有の國俗と和合して大なる影響はなかつたが、佛教は一の宗教で、儒教とは大にその趣を異にし、その因果應報の説の如きは頗る人心に變動を與へた。廊戸皇子が馬子の弑虐を不問に付し給ふたのは畢竟佛教の悪影響と云ふべしである。

當時の祭祀は清淨の地、樹木の茂れる所を擇びて、神籠とし、之に幣帛を備へて敬意を表するのみで、極めて質樸の式なりしに、佛教傳來の後には偶像を造り、殿堂を莊嚴にし、音樂を備へて、之を禮拜するなどの事始まり、爲に建築工藝の上に、至大の進歩を來し、その經文は漢文の力を要するので、學問も亦之が爲進歩を促がされるといふ風に、種々の點に於

て、文明の進歩に貢獻する所はあつたが、然し之がため、我が國固有の淳朴質實の美風を害した事も亦見逃がすべからざる事である。

聖武天皇、光明皇后は深く佛法に歸依し給ひ、國分寺の創設、東大寺の建立、大佛の鑄造等ありて、大に佛教の興隆に力を竭し給ふた。天皇御讓位の後は、僧となり給ひ、至尊の御身にあり乍ら三寶の奴と稱し給ふた。孝謙天皇も亦佛事を好み給ひ、國用夥くして、財政亂れ上下共に奢侈に移つた。天皇御重祚の後有名な道鏡の變があつたが、至誠和氣清磨の如き人物があつて、皇統の危機を一髮に維ぐ事が出来た。畢竟かゝる不祥事の生じたのも、基はと云へば、天皇が佛に淫して、神道を遠ざけ給ふたのが、その遠因をなして居る。

佛教はその傳來の初めに當つては、宗派の名もなかつたが、この期に至りて俱舎、成實、三論、華嚴、法相、律の六宗に分れた。華嚴と三論は東大寺

之を弘め、法相は興福寺之を弘め、諸宗の内最も盛んであつた文武天皇の朝、道昭は火葬を始め、役小角は咒術を修めた。後の修験道は皆之より初つたものである。

神道よりみて、この火葬といふ事は頗る怪しからぬ事である。元來神道では非常に火の汚れをいふので何んな汚物でも焼く事を好まない、で不潔な物は水へ流すか、土へ埋るかして、その不淨を去る事に努める。火食を食したしたのは、比較的近くの事で、上代にあつては玄米を水にほとばして食用に當てた。この事は古記録を見ると直ぐ分る。屍體も無論土葬にしたものである。之は勿論火の汚れを忘んだものに相違ないが、又一方には、日本人の美はしい性情から云つても、人體を焼くといふ様な惨たらしい事は、到底正視し得なかつたであらう。又咒術など云ふ事も、嘗て無い事である。我國に於ては咒術などは禍

津神に屬するものとして、之を口にするも潔ぎよしとしない。神道は直ぐなる道である。神道の神は正直の神である。然して咒術などを受け給ふ様な神ではない。己れを直うして、清淨の心で祈るものには、神はそれくその願を満たし給ふのである。

吾人は漫りに佛教を罵るものではない。佛教にして如何なる誘惑を試みるも、其根本に於て、深き根據あり、又深遠なる哲理を藏するに非んば、到底一千有餘年の間、吾國民の一部に偉大なる勢力を揮ふ譯にはゆかなかつたであらう。この意味に於て、吾人は佛教の價値を認むる。又之を以て他山の石となし、修養書の一として研究するも、頗る結構な事だと思ふ。

然し今日の淫佛家の様に、之を信するの故を以て直ちに神道を排し、甚しきに至つては、政教を混同し、佛の教理を以て直ちに政治上に用ぬ

んとするが如きは、非理矛盾の甚しいもので、般鑑遠きに非ず吾人にし
て若しかゝる非理を斷行して憚る所なくんば、是れ實に賣國の奴にし
て、亡國の端は、恐らく之より發するであらう。

一十六、現人神は神道の理想

唯に神前に佳物を捧げ畏げに額つき仔細らしげに拍手鳴らして禮
拜するを以て、敬神の實意を得たりとするものあらば、是れ實に百歩を
志して、足未だ五十歩にも充たざるものである。成程之も亦神に通ずる
一手段であるが、神道の大精神が之に盡くると思ふ者は、是れ未だ神道
の何たるを知らざる者である。神道の大理想は、決してかゝる些々たる
形式にあるのではない。

さらば其大理想は何かと云ふと、吾人の見る所に依ると、神道の到着

す可き理想は、吾人が直ちに現人神となる事だと思ふ。これ迄も屢々繰
り返して云つた通り、神道の神と云ふのは、獨り超自然の中に限らず、天
地間一切の事物に就いて、秀抜なる力量若しくは品質を有するものは
悉く神である。宇宙間に於ける事物の程度が無限なる如く、神の階級も
亦無限にある。天之御中主神の様に宇宙間唯一の主宰神もあれば、又鳴
る神(雷)の様に大して有り難く無いものもある。

禽獸草木の神に較べると、人間の神は遙かに貴い、又その同じ人間の
中でもいろいろで、殺人犯で入牢する者の神と、人格識見兼ね具はり一
縣の知事にもなろうとする人の神とは、これ亦大分違ふ。更にその上に
も無限の等級があつて、乃木大將の様な純白至誠の人の神は、人間界の
至上神で、その神性の程度に於て、天津神と大した相違は認められない。
こふ云ふ風に、現在生きたる人間にして、その實天津神と殆ど異らざる

神性を有するものを、神道の方では、現人神と云ふ。現人神とは、現在の生身が即ち神といふ事で、佛教の即身成佛といふと同じである。明治天皇や乃木大将のやうなお方は即ち現人神である。

人間はどんな詰らぬ者でも、若し絶えず修養して、悪は小悪と雖必ず之を省き善は小善と雖必ず之を攝取して向上精進に一刻の油断もなかつたならば、如何に愚痴鈍根の者でも遂には現人神の境地に達せられないものでも無い。

神道の特色は、實にこの現人神の理想にある。天地萬有に神性を認むるも、確かに神道の一大特長であるが、更に是等が向上して現在の現つ身を以て直ちに神となり得ると説く所は實に一大卓見であつて、諸他の宗教に見るを得ざる所である。神道が死の宗教でなく、生の宗教であり、又未來の宗教でなく、現在の宗教だと云はれるのも、つまり現人神の

理想に胚胎せる事を知らねばならぬ。

神道の望む所は、現在の幸福であるが、又一面死後靈魂の存在を説いて居る。死後靈魂は肉身を離れて存在し永遠に活動して、無限の向上を續くるものだと言つのである。

茲に注意すべきは、吾人の靈魂はかくも貴ぶべきものであるけれど、之は何所迄發展するも遂に相對の域を免れない。如何程向上はしても、遂に天之御中主神にはなれない、この點は佛教とも基督教とも實に根本的に異なる所である。

佛教では、即身成佛といつて、直ぐ佛になれる。之は現人神とは違つて、絶對の佛になれるのである。又基督教では、教理の上では何うかは知らぬが、信徒の中には、自身神なりと稱して居る人間が少くないから、是れ又自覺次第で、直ちに神ともなれるであらう。

神道が造物主たる天之御中主神と他の諸神との間に、一條の溝渠を穿てるは、之は道理のある事である。平田翁の説に依ると、御中主神は太陽で、他の諸神は太陽より分けられたる火である。火はその本質を太陽と同じくすれど、如何に集りたりとて、到底太陽となる事は出来ない。之と同じく諸神は如何に努力するも、御中主神とはなれないと云つて居られる。

この説は誰が聞いても成程と首肯される事であり、子が父と同じになり得ない如く、吾人は造物主にはなり得ないけれど、略ぼ之に近いものにはなる事が出来る。かく吾人の理想にも、努力にも、相當の制限は置かれてあるけれど、吾人は唯一意向して、現人神となり、造物主に一歩づゝ近づくと、以て、人生の目的なりと信ずるものである。

一二十七、神々の御性格及び御事業

神代にあつては、萬事お氣樂で、神々は高天原で手を拱ぬいて居られた様に思ふ者があるかも知れぬが、神代でもナカ／＼左様呑氣な譯ではない。神々には夫れ／＼御職分があつて、例へば豊受神は庖廚を司どられ、手力雄命は軍事を統べられるといふ風に、竈の神、門番の神、衣類の神、音樂の神と八百萬の神々は、何れも異つた御職業を持たれ、従つて御性格は各々異つて居られた。

神々の中で、最も圓滿な御性格を以つて居られたのは、申す迄もなく、天照大神である。女神でおはし乍ら、一面頗る雄々しく、又厲しい所がおはした。之は須佐之男神に對するお仕打でも分る。素より須佐之男神の様な亂暴をすれば、どんな神でもお腹立にはなるが、天照大神の御腹立

は頗る激しい一寸した汚れを忌まれる御心から天の岩戸へ隠れられる一方にこふした烈しい御性格があるかと思ふと他の一面には又何ものも懐かすには居られない様な温かな御仁徳がある一方に天上天下を御經綸になられる様な政治的御手腕があるかと思ふと他の一方には又天の岩戸を押し開いて音楽を聞かれるといふ様な藝術に對する並々ならぬ御趣味もあるこふ云ふ工合にお一人の身體に智仁勇其他あらゆる諸徳を兼ね具へて居られたお方である。

須佐之男神は之とは全く反對に御性格に非常な缺點があられたが、其代り一方勇力と知略とは餘程秀いで居られたのである須佐之男神を以て單に勇力のみ神とするは未だ盡さぬ所がある成程命が肥の川上に八頭の大蛇を殺されたのは命の勇氣を表したものであるが命の御事業は決してこんな武者修業的行動に盡くるものではない。

命は又一面に於て大なる政治的手腕を有せられて居た之は即ち命の夜見の國御經營で立派に證據立てられて居るかくの如く命はその知その勇に於て萬人に秀いづる御英傑であられたが遺憾乍らその御徳操に於て少なからぬ缺點があられた。

御兩親の伊邪那岐伊邪那美兩神はお二人共御性格の秀いでたお方であつた陽神はその御愛子の天照大神に引き寫しの御性格であつた然し流石大八島をお産みなされた御神だけあつて卓厲風發といふ程に御氣質の荒々しい所があつたこの點は天照大神なども大分御氣質を異にした所である潤達の御氣象は御一代を通じて現はれて居るが就中最もその著しく現はれたのは陰神が汚れを忌んで黄泉國へ行かれたのを追はれて陰神を散々御面責なされた上汝にして悔ひ改めざれば千度び縊り殺さんと云はれた所に陽神の御氣象は遺憾なく現

はれて居る伊邪那美神は御愛子須佐之男神に何所か似られた所がある。素より須佐之男神の様な亂暴もなさらなかつたが何方かと云ふと御氣質が少し頑固であつた此點がよく須佐之男神に似られて居る。陰神が火の汚れを忌まれて黄泉國へ行かれたのは貞淑を貴ばれる女神として、さもありそうな事で、この一事は日本婦人のしほらしさを遺憾なく示されたものとして、頗る嘆賞に値ひするが、唯陽神が迎へに見えられた時、ごちなく御断りになられて遂に永遠に黄泉國にお止りになつたは、少しく頑なる御氣象だと思ふ。然しこの頑固の半面は意志の鞏固であるから、之をしも強がち退くる譯にはゆかない。

天照大神以後の英雄神は、大國主命である流石は須佐之男神が八十柱の御子達の中で選ばれた丈あつて、父神以上に偉大なる御性格があられた。この命は父神の命に依つて、大八洲を治められたが、その御智術

と御勇力は申すもさらなり、其御徳望の大なることは、大八洲あつて以來未曾有とも云はれる程で、殊に醫藥の事に迄御力をお伸べになつたと云ふをみても、この命の如何に御英傑にましましたかが分る。斯の如く御性格は各々異つて居られるが、その公明正大の念と、國民を思ふ至誠の心とは、どの神々にも共通せる御神格であつた。

二十八、神道と祖先崇拜

今日の定義に従へば、國家とは、土地と人民とそして之を支配する主權とを具備せるものだといふ。その人民が各地からの渡り者であらうが、主權者が、兵力で威壓する會長的のものであらうが、その國家たるに於て防げはない、又實際に於ても、今日歐米各國は何れも是であつて、國民の間に血屬上深い關係の無いは、勿論、今より數代若しくは數十代前

に溯ると、全然異つた人種である。歐米各國に於てはこふ云ふ工合であるから、國家的に祖先を祭り、祖先を崇拜する事はない。國家が無頓着であるから従つて家族的にも祖先崇拜と云ふ事は行はれない。

之は歐米許りではなく、東洋で支那や朝鮮の様な萬事回顧的な國柄でも、日本の様に祖先崇拜の習慣はない。日本を除けば、世界各國何の國をみても特に祖先のために祭壇を設ける所を聞かない。祖先崇拜の一事に於ても日本は實に獨特の地歩を世界に占むるものと云はなければならぬ。

日本の祖先崇拜は其歴史に當然の結果と云はなければならぬ。云ふ迄もなく、我が皇室は萬世一系であつて、天照大神より一貫して流れて來れる御血統である。又臣民もそれ／＼の氏姓に依つて、各々の祖先が神代の時代からあつて、その血統も亦一貫して今日に及んだもので

ある。元來祖先崇拜の前提としては、その祖先なる人が確かに判明して居なければならぬ。若し歐米人の様に自分の祖先が何の誰れやら分らなければ、到底崇拜はさておいて、人の質問に答ふる事すら不可能である。

極端な下等社會は知らぬ事、苟くも社會に出でて多少の面目を保てるものは必ず一家の系圖なるものがある。系圖の無い所でも自家の祖先の何の某だといふ事は心得て居る。一段高い所には美々しい厨子を構えて、先祖の靈を祭つてある。斯して先祖の靈は一家の中心となつて、一家に事ある毎に必ず之を報じ、希望ある時は必ず之に祈願をなし、神前に常に美酒佳肴を捧げ、又四季折り／＼の美花をそなへ、果物を供するといふ有様で、家族一同の愛慕と尊敬とを集めて居る。之は實に日本國民の孝心の發現であつて、國粹の美點は誠にこの祖先崇拜の中に含

まれて居る。

皇室に於かせられて御先祖天照大神を御崇拜遊ばす事は、非常なもので、國家に事ある毎に必ず伊勢太廟に祈願を籠めらるゝは、萬民の等しく瞻仰する所である。

之を要するに、我國は上下三千載に亘る歴史を有し、國民の祖先は何れも神代に於ける我國の建設者である、我が國は決して一夜作りの國家でない、我が國の祖先崇拜は歴史の齎す當然の結果であつて、確かに我國粹といふべしである。

一十九、日本國民は神道的修養をなせ

今日は實に修養法全盛の世の中である、醫者でも僧侶でも學者でも、兎に角何かの學問をした者は、起つて青年の爲め修養法の講釋をする。

今日の如く青年の風紀の墮落せる世に於て曲りなりにも兎も角修養法と銘打つたもの、講せらるゝは甚だ祝す可き事である、唯今日の修養法の弊とするは、多くは一知半解なる衛生法機械的物質的なる養生法で、眞に青年の精神を陶冶し延びてその肉體の理想的鍛練を計る様なものは、吾人不幸にして未だ見る事が出来ない。

肉體偏重の弊を根本的に除いて、眞個養生法の精神に合するものは、唯獨り神道の養生法あるのみである、心身兩方面の養生法は禪などにもあるが、之は外國傳來のもので、厳しく云へば、我國國民性に適合せるものでない、この點に於て神道は實に我が國の理想的養生法と云ふ可しである。

神道の養生法は無數にあるが、就中効驗の最も著しいのは、水垢離と日輪の禮拜である、後者は今日では黒住教の獨占の様になつて居るが、

之は元來神道固有の禮拜で、決して黒住教に限つた譯では無い。水垢離を以て、直ちに今日の冷水浴に比するものがある。然し之は水垢離の眞價を了解せぬ者の言である。形式だけを見れば、成程水垢離は冷水浴に過ぎないけれど、彼にはその中心に、確乎たる信仰の念がある。彼は身體の垢を洗ふ許りでなく、心中の不淨迄も残らず洗ひ落して、清淨無垢の人間となる。この點に於ては、立派な精神修養である。その効果の偉大なる到底冷水浴などの比では無い。

日輪禮拜は、毎朝太陽に向ふて、口より大氣を吞吐するので、之は一種の深呼吸と見れば見へる。然し之も、勿論唯の深呼吸とは大に其趣を異にして居る。彼の吞吐するのは、單に空氣のみではなく、朝の朝らかな陽氣を呼吸するのである。その心身に及ぼす効果は、到底深呼吸などの比ではない。

其他神道には、三つの重なる修養法がある。其一は清潔の修養である。水垢離などもそうであるが、神道の儀式は總て清潔を祟ぶ精神の發露である。神道の清潔は、單に具體的の清潔許りでなく、精神上の清潔を力説する所に、修養法としての偉大なる價值がある。

其二は樂天的修養である。神代の神々に陽氣の神笑ひの神の多いのを知る事が出来る。吾人にして陽氣の修養樂天的修養に志さば、是非共神道の大精神を了解せなければならぬ。

其三は向上的修養である。神道は元來膨脹的宗教で、努力精進を極端に鼓吹する宗教であるから、吾人にして、根本的の大努力を志さば、是非共神道の膨脹的修養に依らねばならぬ。

三十、神道は國體の精華

俗謠子は歌ふて曰く、花は櫻木、人は武士と、この短文句のうち、我が國粹的精神は躍つて居る。

げにや大和民族が中外に對して誇とするは、櫻花と武士道とである、櫻花が日本獨特の花なる如く、武士道も亦我國特有の大精神である、誠にこの二物は天が特に我が大八洲に恵まれしもので、造物主の恩寵と云ふも決して溢美ではない、又是等二物は日本の商標として、高く世界萬國の間に誇示す可きものである。

櫻花の如く美はしく、富嶽の如く崇高なる我が武士道の大精神は、決して一朝一夕の産物でない、その源は遠く神代に發して居る人に依ると、武士道を以て鎌倉覇府以來の事で、決して太古に於て見得べからざる所だと云ふ者がある、成程武士道修養として、完全な形式をとり來つたのは、比較的近代の事に屬するが、然しその大精神に至つては日本に

武士なる特種階級の無かつた時より存在したものである、この大精神を、吾人は大和魂と呼んで居る。

大和魂こそ我が國粹の大精神である、之は實に渾然たる一大精神であつて、之を區分する事は到底不可能であるが、強ひて之を區分すれば、智仁勇の三部分より成り立つて居る、この三要素を具體化したものが、即ち三種の神器である、智の徳は即ち鏡である、仁の徳は則ち玉である、勇の徳は即ち劍である、かくして三種の神器は三種の徳を代表して、大和魂の表現となつて居る、我が皇室が此等寶器の授受を以て、皇位繼紹の印とするは、即ち皇位を禪らるゝと共に、皇位と共に大和魂を禪らるゝ事を現はされたものである。

この三種の神器を以て初めて天孫邇々藝命に御渡しになつたのは、人も知る我が皇室の御先祖、我帝國の建國者たる天照大神である、天照

大神は初めて大和魂を三種の神器に具體化されたお方で或意味に於て大和魂の元祖と申し上げても宜しかろうと思ふ。

大和魂の元祖といふに語弊があれば天照大神は大和魂を初めて説明せられ初めて紹介せられたお方である又天照大神ほどよく大和魂を完全に具備された大神はあるまい即ちその智と勇は天上天下を明らかく治むるに足りその御仁徳は流石の荒神須佐之男神をして遂に膝を折らしめ給ふたではないか。

天照大神を初め奉り皇統を承け紹ぎ給ふ方々に一人として大和魂の備らせられぬはなけれど就中國粹の權化と仰がるゝは神武天皇明治天皇の御二方である後醍醐天皇の御宇には黒雲天を蔽ふて天皇の御生涯は御薄運を以て一貫して居られ並々ならぬ御稜威も現はれ給はぬ御いたはしさの極みであるが歴史の傳ふる所に依ればこの帝は

御天資の秀で給ひしは申す迄もなく最も多く國粹的精神に富まれ純乎たる大和魂を有たれたる帝である。

和氣清麿楠正成乃木希典この三人は我が國々粹の三寶で櫻花の如く美しく富嶽の如く崇高なる大和魂を遺憾なく具備したる武士道の典型である。

鎌倉覇府以來武威獨り盛んにして天日の光を遮り奉り切りに正論に壓迫の手を加へたので正義公論は地を拂つて空しく覇府に阿る諂媚武士のみ時を得顔に跋扈した殊に世を下るに従ひ士道愈々頹廢しかくして北條は源氏より下り足利は北條より下り足利の末より戰國時代に入れば世道人心の墮落その極に達し有ものは姦淫強盜のみにて我が國粹は暫くその姿を隠したのである豊臣氏を経て徳川氏の初期に入るや秩序を回復し切りに古學を振作したる結果武士道も稍や

復活して、配下の武將も、その野獸的境地より脱する事が出来たが、其後文學の隆盛と共に漸く文弱の風を増長し、士道地を拂つて空しからんとするに至つた。

然るに徳川の末期に至るや内外の機縁熟したるを以て漸く正義公論の士輩出するに至り、國粹の大精神は茲に於て乎、大に興張さるゝ事となつた。即ち學者としては神道の本居平田兩翁を初め、平野國臣其他の尊王論者を起たしめ、漢學者にては、日本外史の山陽の獅子吼するあり、徳川光圀の大日本史を修めて、勤王の志を寓するあり、是等と前後して、高山彦九郎、林子平、蒲生君平の輩出するあり、少しく後れて藤田東湖、吉田松陰の出づるあり、かくの如く、僅かに二三十年間に、勤王憂國の士並び起り、梅櫻桃李一時に開くの觀があつた。實にこの時程我が國粹的精神の高調せられた事は無い。

維新當時に於て興張せられたる皇國的大精神は明治年間に入るも尙その波動を收めず、遂に日清、日露の二大戦役となつて現はれた。日清戦争に於ては陸には山地あり、海には樺山あり、兩々相待つて大和魂を發揮したが、日露戦争に於ては旅順の乃木は對馬洋の東郷と共に、世界環視の中に、最もよく我が國粹を發揮した。

殊に吾人の最も悲壯に感ずるは廣瀬中佐の最期である、その旅順閉塞の一切那に於て、彼が渾身の智仁勇を悉く發揮して、史上曾て見ざる最も悲壯にして、最も意味ある戦死を遂げたるは實に我が國粹の權化といふも過言ではない。吾人は彼を軍神と云はんより、寧ろ國粹の神として、彼のため永く祭壇を築きたいと思ふ。

げにや大和魂は、我が國體の精華で、上下三千載の歴史を貫流して居る。我が國の大人物にして大和魂を有せざる無く、又我が國の大事件に

して、大和魂の發現を見ざるはない。この意味に於て大和魂は我が邦の至寶である我が皇室に於て三種の神器を尊崇し給ふが如く、我等國民も亦無形の大和魂を愛寶する所がなければならぬ。これ實に我が國運をして隆盛ならしむる唯一の途である。(完)

敬神 崇祖 神道精義終

大正三年九月十九日印刷
大正三年九月廿二日發行

不許	複製
----	----

著者 宮地 猛 男
東京市小石川區大塚窪町十一番地

發行者 永島 爲次郎
東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷者 深山 一郎
東京市神田區雉子町三十四番地

印刷所 成章 堂

發行所

東京市神田區錦町二ノ三
振替口座一三九九四番

永樂堂書店

永樂堂新刊書內容一斑

革新淘宮術會長 竹內師水先生講述 大好評三版發行

處世 活用 淘宮術傳習錄

菊判合本全二冊
紙數千五百卅頁
背皮金文字入美製
正價金五圓
特價金四圓五拾錢
送本料貳拾錢

本書は舊式淘宮家が淘宮術を今尚ほ神秘口傳として親子兄弟夫婦の間にも洩してはならぬと唱へて居る弊習を打破り之を公開して通信教授法に依り傳授したるものにて内容を初傳(十二宮講義)中免(觀相講義)講話、淘話、淘詠集講義、三輪問答、雜錄、質義應答の數項に分ち、毎月一冊宛發行、滿一年を以て完成し、あらゆる方面より斯術をどんな人にも直ぐ分る様、やさしく面白く説明されたものなれば一度之を讀めば斯術の宗教心學杯と異つた趣味、効果の著しき事を十分に呑み込めるのみならず數多の會員の質問に答へ嚙んで含める様一々處世の要道を指導せられたものにて品性の修養、家庭の不和合、立身開運の要道、職業の選定等に就て煩悶疑惑を抱く人は本書を座右に備へ、朝夕熟讀玩味せば世の中が楽しく面白く開運發展する道求め得べき一大寶典にして淘書として周到完備せること本書の右に出づるものなく、淘宮界空前の名著なり、淘宮家の是非秘藏すべき經典也。

革新淘宮術會長 竹內師水先生著

最新刊 處世 淘宮問答

三五判全一冊
總クロス美製
紙數百六十餘頁
正價金四拾五錢
送本料不

近來淘宮術の効用を知らんと希望する者寡しとせざるも未だ之を早分りのするやう簡單明白に説明したものが無い本書は能文快辯なる竹内先生が滿腹の蘊蓄を披瀝して從來の淘宮に關したる人の不審を抱きし一切の疑問を解明し斯術の主眼、真趣味、効力を明示し修身、齊家、處世の要道等を何人にも一讀了解し得らるゝやう問答體を以て懇切に説明したるものなり。

晋稚川原著 日本太田北水先生譯

最新刊 萬夢獨判

四六判全一冊
布表紙美製
紙數六百六十餘頁
正價八拾錢
送本料不

原書は稀世の珍本にして夢占の部廿四卷夢禳の部一卷なりしを太田北水先生が通俗平易の文章に譯し振かな附にて何人にも判斷の出來得るやう説明したる空前の夢占全書なり、内容を百四十八部類に分ち夢の總數一萬二千五百餘件あり其他惡夢を吉夢に轉する夢稜秘法、夢占秘訣等あらゆる夢占に關する事一切網羅せざるなき稀世の珍書也

西川光次郎先生著 (總ふりかな附)

最新刊

靈驗申道教祖傳

四六判全一冊
紙數百四十頁
正價金四拾五錢
送本料四錢

要目 日本神道概観○禊教祖○黑住教祖○金光教祖○天理教祖○神理教祖○富士講開祖○實行教扶桑教祖○御嶽教祖○丸山教祖○修成教祖○大成教祖○神習教祖○神道本局大社教神宮教○淘宮術の開祖等の各略傳及教義と傳道振り○結論日本神道の將來

日本神道十三派の教會は孰れも何十萬何百萬の信者を有すれども、未だ其開祖の傳記あるを見ず、著者多年東奔西奔或は諸家を歴訪し或は諸書を涉獵して其事蹟を尋ね今回列傳として刊行するに至りぬ、各教祖は非常の難行苦行し、靈感ありて貧者病者身の修らざる者を助け又は國家的觀念を以て天下泰平五穀豐稔を祈願する等其思想の偉大なる嘆驚すべきもの多し、信者若し一讀せば一層信念を厚うすべく又非信者と雖も宗教の人心變化に及ばず大なる力と至誠神通の機微とを察せらるべし。
(各教會より十部以上の注文は割引に應ず)

革新淘宮術會長 竹内師水先生編

新刊 淘宮詠集 量丸十九 先生道歌抄

菊判全一冊
紙數二百一十頁
正價金五十六錢
送本料六錢

本書は淘宮丸三翁が常に門人に對して銘々がもし氣の重くなる時あらば此歌集を通覽せよと示されたる道歌にして人世百般の心得を狂語俚語の體を以て説破せられたる淘宮詠集並に量丸、十丸、勝美、一元諸先生の道歌及び淘宮以外の諸賢哲の詠み遺されし修身齊家に必要の道歌千五百餘の歌集にして何れも千古不磨の名教也。

從五位 醫學士 森友道先生著

新刊 迷信 淘宮術の真相

菊判全一冊
紙數二百一十頁
正價金八拾八錢
送本料八錢

立身開運の要道たる淘宮術の眞價を知らぬ者はフン夫れば九星か占筮かと噴はす嫌ひを爲す者あり、又信仰を穿き違へたる迷信あり、斯術に精通せる森友道先生深く之を遺憾とし該傳の識見を以て神佛諸教との關係を比較對照して現代道徳の標準、處世上の羅針盤、精神慰安の根據は淘宮術に如くものなしと説破せられたるものにて斯術の根本原理は實に高遠偉大な事者であることを證明したる者也即ち各人天賦の氣質を矯正淘宮術の天運開發の方法を示したる最も時弊に適切なる要急の事業である事を説いたものである故に爲政治家は勿論教育家宗教家銀行會社社長及我が一身一家を治むるにも男女共に研究すべき最善の活教典也敢て一讀を勧誘す。

21105

醫學士 森友道先生著

陽發 樂觀 人生と陶宮術

菊版全一冊
紙數百八十頁
正價金七十錢
送料八錢

陶祖横山丸三翁は「運を開く道を造りて置いたゆゑ來るならおいでいやならおよし」と門人に示されし如く開運の術は陶祖が自から案出せられしものにて本書は斯道に精通せる森醫學士が陶祖の經歷及人格、陶宮の要義、體質と氣質、三輪と畑、性癖、私慾、感情、品性、自我心の矯正、本心の力、陶宮術と衛生、祖先と宇宙、天地の恩恵等に涉りて陶宮術より觀たる人生の意義を斯道に據て縦横に論評解説せられたるものにして斯術は人生に取つて處世道德の上にも又宗教を信ずる上にも缺くべからざる指南車である、即ち斯術は精神慰藉、開運長壽の良劑なり。

終